

松窓雜錄目次卷之一

麻布氷川宮祭禮度

遠山氏藏鏡

度牒

長崎之烽火

越後國地震 長野氏來紙

琉球人江都入 菅絃隔、始末

美濃國地震

七不思議

流行放言 五條

神田橋外報讎

八幡郷古鐘

石川總長畧記

倭郡數

長寄珍事

京都地震

水戸殿御書舟之寫

流行篇

遠州之敵討

天退堂大文字

流行文章 并注解



狸子僧

乎古止點

山崩家話

百文錢

古尾

○麻布氷川宮祭終度

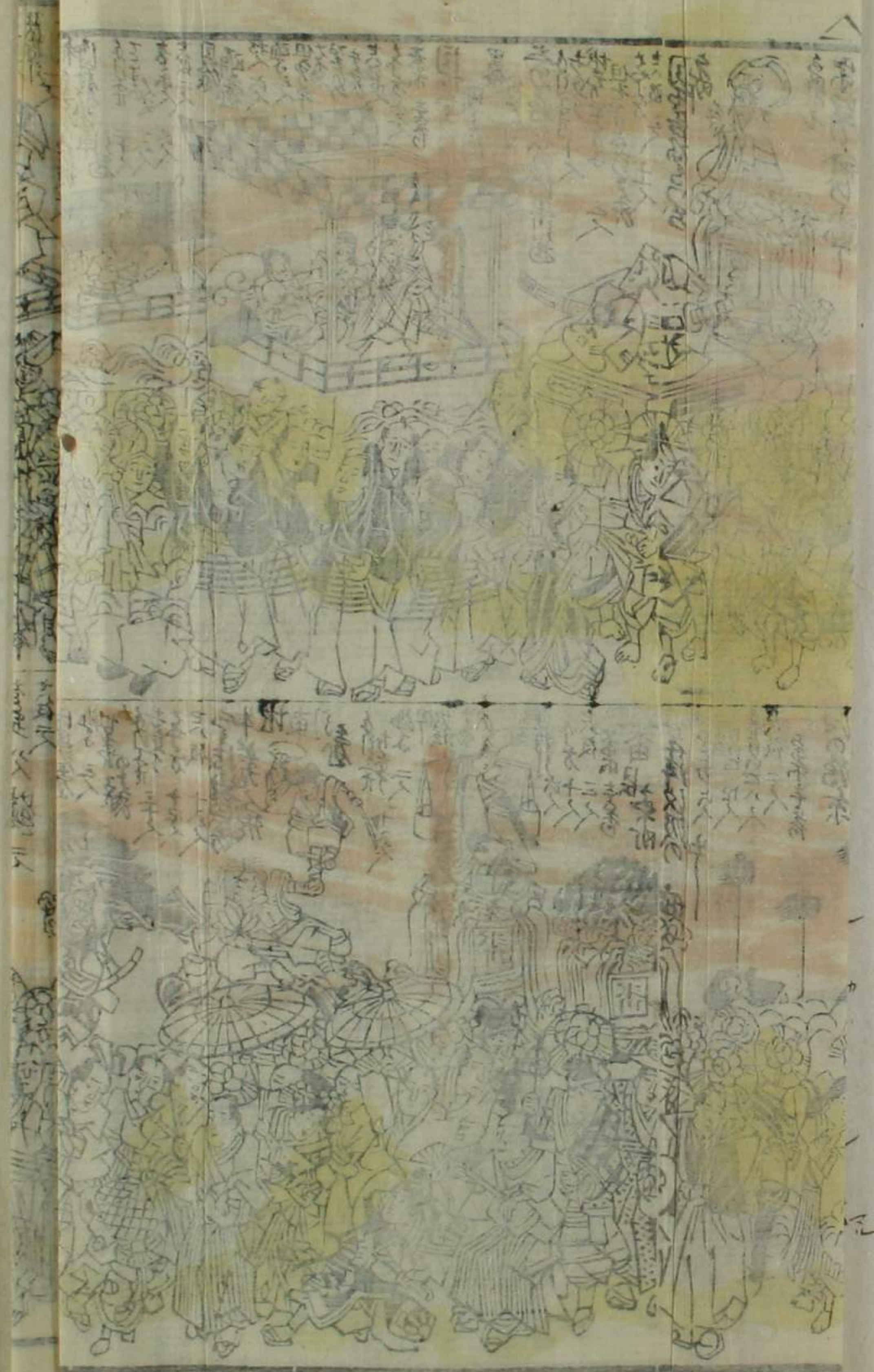
文政十三年庚寅八月十七日四十二年目まで度其形勢
 実々仰山の事云七月比の評判尤高し古老の老道
 又先年の編組と云々第一の衣裳と云々此の山王
 此の山王の事云々金銀の織羅紗襦袢と四五枚の
 皆推して云々か引物の類と云々百信と云々其
 名を云々俵の唐土及び此の事云々此の事云々
 又掲げや市史の内云々家云々此の事云々此の事
 こと引物予う屋敷あり通り云々其目と云々此の事
 麻布町の店敷町あり換敷と設け幕張金屏紅繩と
 設け置と云々の事此の事云々此の事云々此の事
 此の事云々此の事云々此の事云々此の事云々此の事

若くは間區てき、殊に混乱及ひ、後圖面のみ、川橋を
 午時に見分お、御まが、引お、續き、通る、交り
 二三度、往來し、通る、お、ま、一、く、来、く、人、其、北、山、坂
 多、く、隙、の、所、お、ま、多、く、馬、中、日、言、及、び、市、史、より
 夜、中、の、言、の、ま、一、編、と、お、ま、及、び、皆、信、お、及、び、一、り
 予、が、危、敷、お、り、早、終、神、午、後、引、拍、二、三、夜、入、り、神、樂、中
 多、く、絶、倒、せ、り、是、い、市、史、お、ま、多、く、踏、と、會、お、り、こ、う、伝、お、せ、
 お、ま、及、び、一、り、一、辺、の、清、産、別、業、も、大、お、ま、多、く、入、牛、の、ま、
 此、お、ま、右、の、娘、お、ま、お、同心、と、お、ま、年、番、名、も、多、く、呼、お、ま、
 お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、
 お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、
 七、村、の、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、
 七、村、の、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、

終、度、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、
 燈、火、の、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、
 長、篇、の、漫、言、と、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、お、ま、

君、不、聞、氷、川、御、祭、話、町、中、氏、子、擲、高、賣、
 老、人、志、我、烏、頂、天、取、品、評、充、世、界、
 昔、時、御、祭、雖、過、分、豈、及、當、年、趣、向、半、
 傳、謂、山、王、全、閉、口、今、度、評、判、大、評、判、
 家、争、一、志、身、上、面、不、負、飾、錦、衣、
 節、得、奪、絨、絨、縮、緬、或、又、羅、紗、猩、緋、
 女、子、鉄、棒、勇、打、扮、唐、人、管、絃、野、暮、姿、
 樓、船、糴、出、恪、別、事、噺、家、行、列、存、外、宜、
 打、雜、太、鼓、如、雷、響、掛、列、挑、灯、自、月、明、

杵屋先生調子高。清元親玉音曲清。
 集來見物幾千萬。助老抱幼不厭遠。
 前夜賑合昂如沸。當朝混雜倍甚。
 街市店前構棧敷。屋輔窓外捲青簾。
 人迎客待時刻。恰似炎天願雨露。
 練込不揃大隙取。見分濟比已午過。
 午過率出實延刻。三里引場難處多。
 牛車地車不自由。踊兒警固惑山坡。
 方、所望難點止。緩、率中及日晚。
 日晚一切不可引。市史嚴命響諸方。
 折角御祭半途止。散、班、皆分行。
 白金近邊曾不通。見者悅賞不見怒。



日晚一切不可引。市史嚴命響諸方。折角御祭半途止。散班皆分行。白金近邊曾不通。見者悅賞不見怒。

與初違而評判惡。年番被叱名主誤。於云七村相談決。率直御祭辰年秋。氣休口上一時遁。雖然是亦實難謀。

文政十三年寅八月十七日

麻布芥大明神御祭禮會







御免
板元
森屋治兵衛



右に張る書附を禁るは引物ある者にて扱ふべき書
附あり最神のハ是に信あり日律經の相詩六七と有るは
別に書し置りて置く也

天保三壬辰年八月十七日再ハ条修度りしうは及ハ以て
遠行行列嚴言て經國系引の函サハ私るも由り
と整ひしうされし衣袋其附書多ハ以て石友對減り
ありし由り連りて予ハ門前ハ已刻比ハ皆通果り
約束し置る友人其分の書ハ皆る聲ひくも予ハ客の
こと邊の要くありし是ハ示經劍の事ありされしは及
首尾ぬくお濟しす是ハ隔年ハ条修言りて決定の
しハ觸りし由り或ハ社内字廣の修復又ハ神輿運送
ありし由り天保七年ハ及りし一ハ由り治りし由り

○八幡郷の古鏡

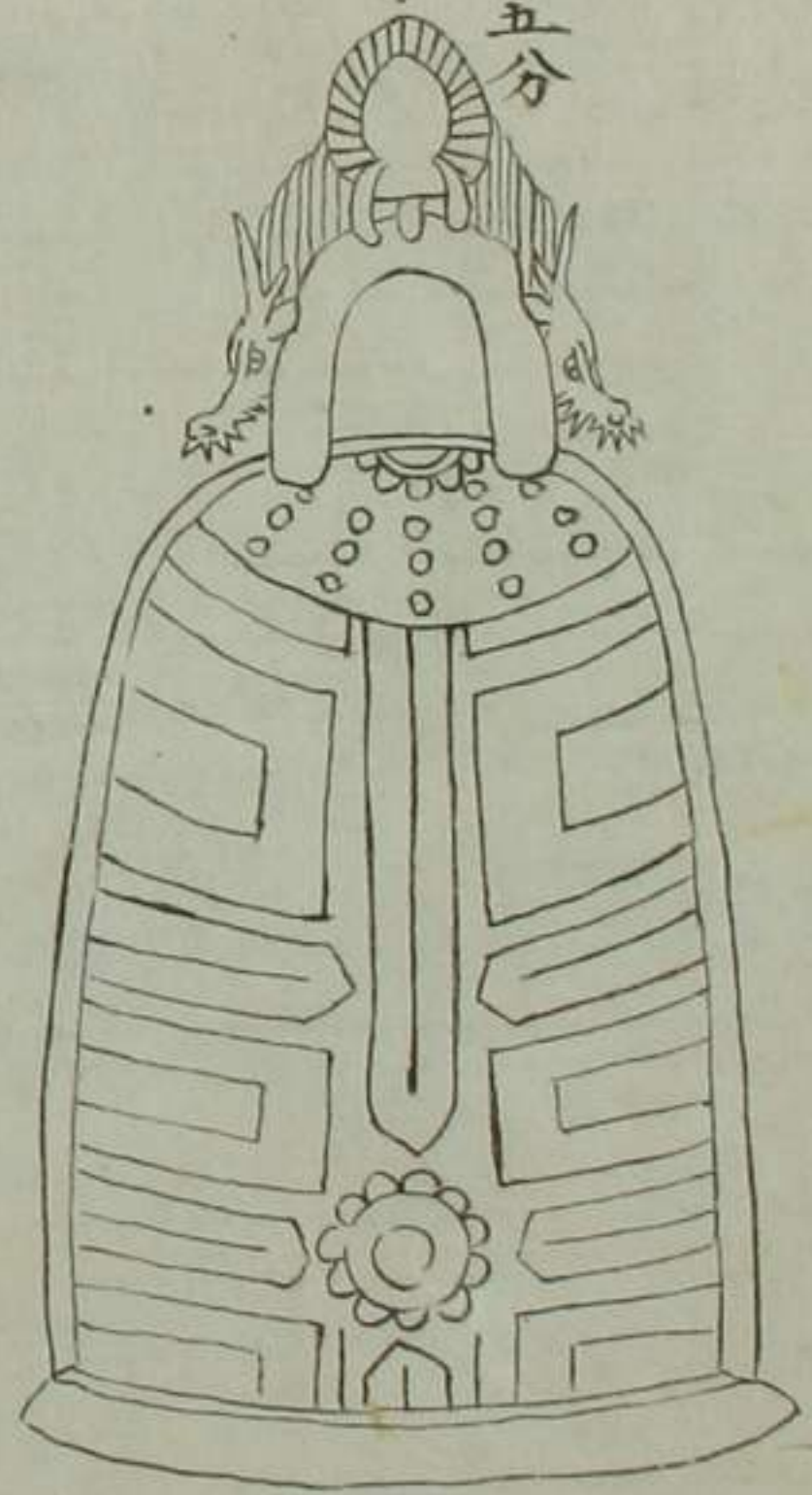
文政十一年戊子十月十七日信齋先生ハ國方是馬山の邊に
遊覽せり其時ハ幡郷と稱りて古鏡并傳説し言りし
のやわしきもの赤柿と云たり古鏡ハ法漸寺堂の後
ありし寺を古鏡郷と云り年久年銀と扱へ人乞ふ
任せてありし相幸たのこ

下總國葛飾郡八幡郷

別當 法漸寺

寬政五癸巳年正月十九日 出所銅鐘之銘曰

丈三尺龍頭七寸五分
指渡戴尺壽寺



敬奉治鑄銅鐘

大日本國 東州下總 第一鎮守
葛飾八幡 是大菩薩 傳聞寬平
宇田天皇 勅願社壇 建久以來
右大將軍 崇敬殊勝 天長地久
前橫巨海 後連遠村 魚虫性動

鳥鐘曉聲
永除煩惱

人獸眠覺
能證菩提

金磬夜響

元亨元歲醉十二月十七日

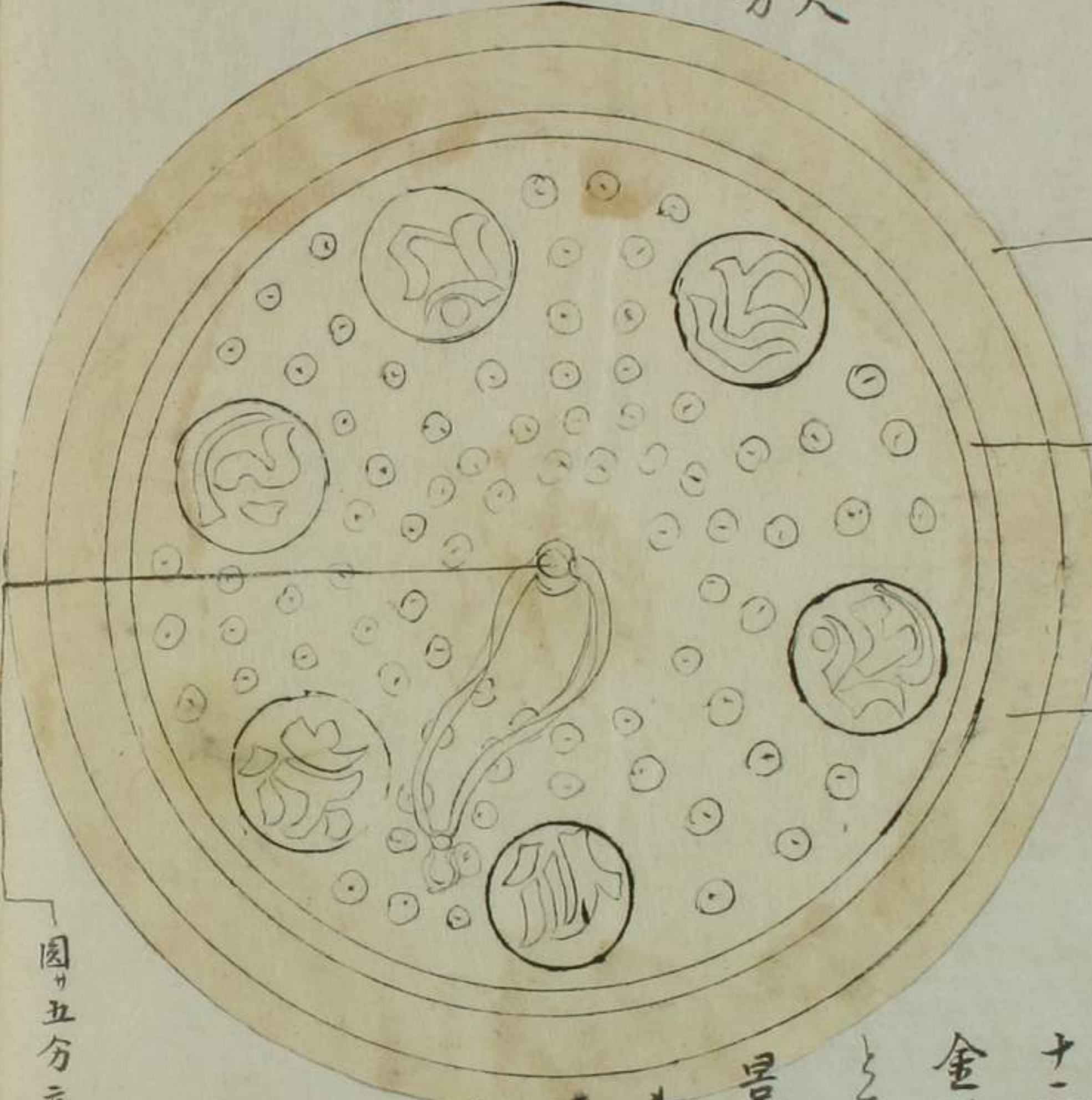
願主右衛門尉九子真吉

別當知四

自元亨元年年今至天保元年曆數
五百九年也

○遠山氏藏鏡

幅三分 一厘一分
 西節の石 三分



圓一尺 二寸二分
 厚一分
 後面 申す

天保六年乙未四月
 十二日夜初更に以今石
 金蘭老翁分予に復
 とく略く一は遠山の隱士
 景晋翁花後あり下
 無垢あり又年曆
 深林あり一依り事由
 不詳尤古鏡なり

六字共
 圓二寸二分

六字共
 圓二寸二分



四分
 教
 七十一點

圓五分高五分

○石川總長畧記

坂家日記

坂上池尻

寬文元年辛丑十月二十日石川播磨守源經長卒五十七年

石川之裔以忠德為男母川場尾

軍刀去傳女

萬治三年庚子十月廿二日石川播磨守總長為大坂定番加賜采地一萬石

東武編年要錄：寬文元年辛丑十月廿二日石川播磨守源經長卒

石川播磨守源經長卒。又慶延畧記云云

林秀作

辛丑十月下旬石川播磨守卒於難波城斯人累世士林俊也今

茲被撰拔自東武往為難波城留後加其食邑人皆以為榮未踰年

而不幸如此余相識有年不堪歎惜作枕詞一絕以呈令姪殿中監君云

名在武林超等倫一方守衛一藩巨難波十月早梅茁乍過暴風無過春

庚寅正月二十四日江州膳所城主大中大夫殿中監石川君忠總易薨於

東武之館聞者無不哀惜焉我即罷四十餘年之舊識也故余亦被

善遇有年矣豈不悲歎乎乃綴野詩一章以擬緇謳云

武名藉甚有芳譽暇日簡編猶卷舒驚見江州夙畔雲班如五馬泣連如

○度牒

我國昔ハ唐の法よりて僧ニ度牒を與へらるこのころハ
わりの度牒の賜せらるる多しゆこゝに記ス

治部尚書

城川路東山東福禪寺童行士思本貫係本州七國縣人事

俗姓恭見年十五歲投禮當寺住持士雲長老為本師賜

紙度牒剃髮受具者

右被太政官符備左大臣宣奉

勅件度者姓恭宜治部省與剃度牒至准

勅故牒

卯文字出此
鳳島

正和貳年四月八日左太史 小槻者稱清特給

參議郎兼治部郎

從四位下行神朝臣康光 馬

典主宰事官

從四位下行勝朝臣定行 沛

鴻臚丞

從位下行平朝臣高廣 祢

鴻臚少卿

從位上行涼朝臣光房 局

典客良中署令

治部主事

正位上行江朝臣公經 局

治部郎中

正位上行涼朝臣光房 局

治部侍郎

正位上行涼朝臣光房 局

右黄色の唐紙五枚重也 堅き人五寸三分横二尺二寸五分
太政官印三所同 印方二寸二分半 大字小字在書ハ是分
大きあり 残ラス版あり 小字及押印大字ハ正和二四八の五

字ハ臨時ニ書ス在書の寫ハ別ニ藏ムニ於て見ルル
專ニ唐の安名を用ヒヨシ及ハ宋の制ヨリ城州路ト
稱セヨリヨリヤ 是ハ正和の後ニ今ハ板紙の書ハ西土ニ
五代の時ヨリ始リ法板ハその後宋の慶曆の年ヨリ始リ我
ノ慶長以前の書皆法板ニシテ後ハ刊板ありヨリヤ
思ハレタリ此ハ膠ニシテ刊板の書ありト云ハ慶長の以
兵礼ニシテハ便利ありト云ハ法板を用ヒヨリヨリヤ

○倭版数

明の成化中ハ朝鮮ヨリ著ス所ハ平通載ニ我ハ
事ニ委安キヨリ云ハ三州ニ百ニ郡トカキ 教書等
國ヨリ在リヨリ 形教の介ハ云ハ事ニ委安キヨリ 異ニ方ニ
テ形教ニ記ス誠ニ書ハヨリヨリ 全ニ文ハ經濟

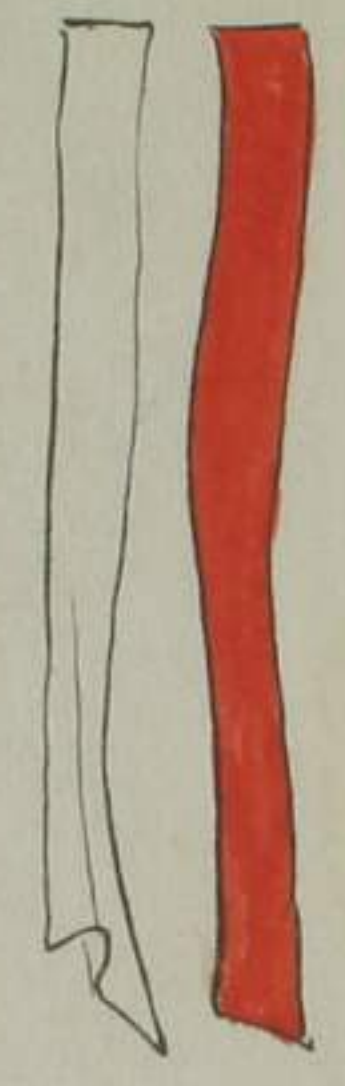
纂要集の巻のなかにて、男をきて延喜式と考れ、五百
 十郡と和漢名数とのまゝとの郡の六百三十ありて、
 二郡と云は、是利公の制ありん、又宋史の五百八十三郡と
 記す、是は延喜の制と支ちるべし

○長崎の烽火

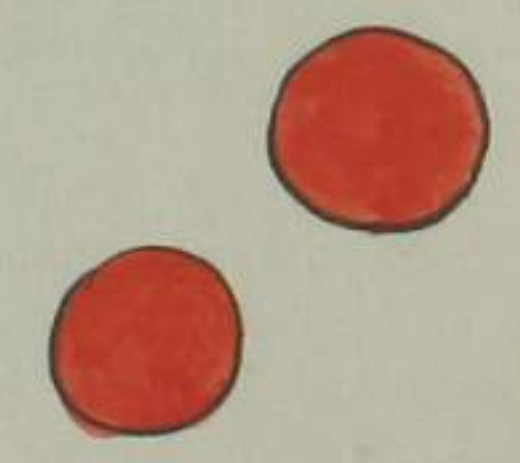
文政十三年庚寅八月二日長崎、西條地方高木内藏元
 とて、江戸他島津海と云ふ打揚入、上院のお圖指廻
 登る、亦平番く色々の形を現わす、其図左の如く、若又
 四五丈小が、二三丈也、予と幸しく、是と見たり、
 其目と

賀流火術の圖

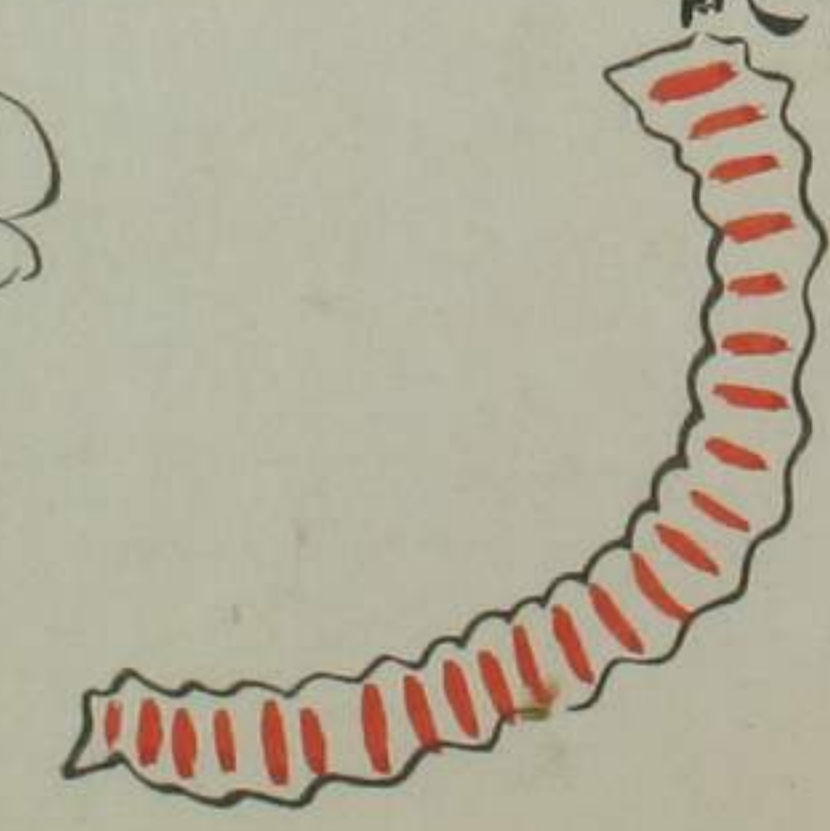
紅白旗



連玉



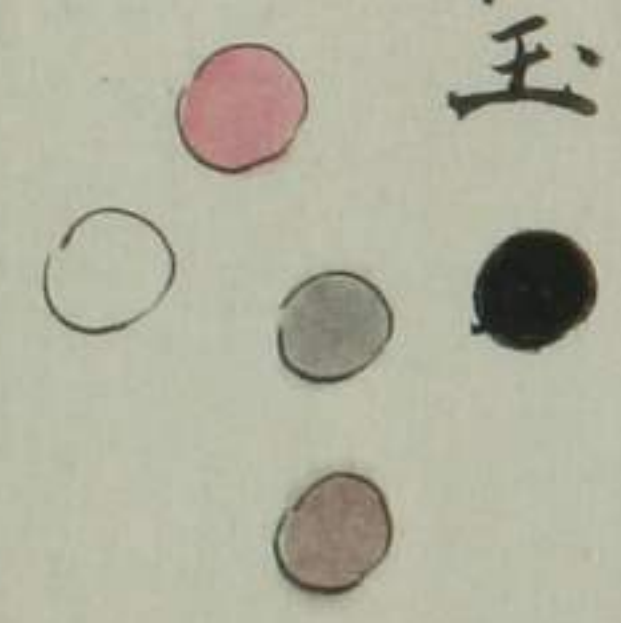
赤雲班龍



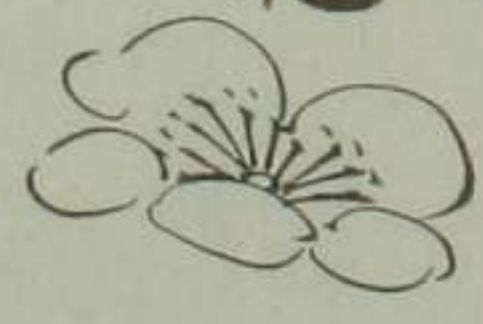
双鯉



五彩玉



紅白梅花



双蝶



蜈蚣

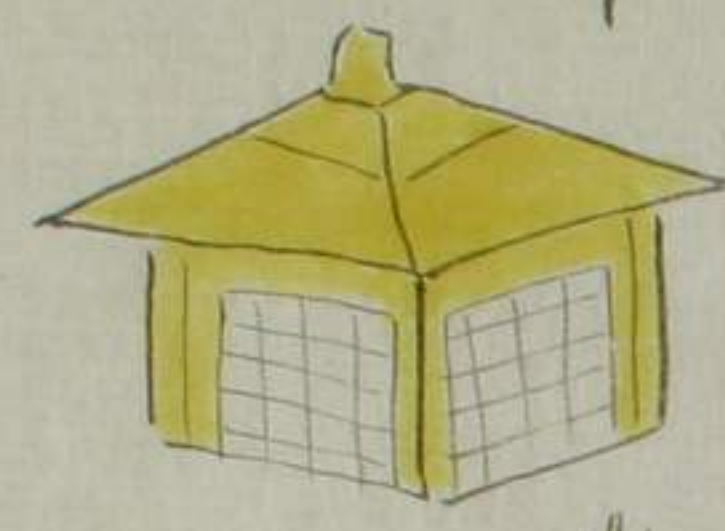


雄雌鶏

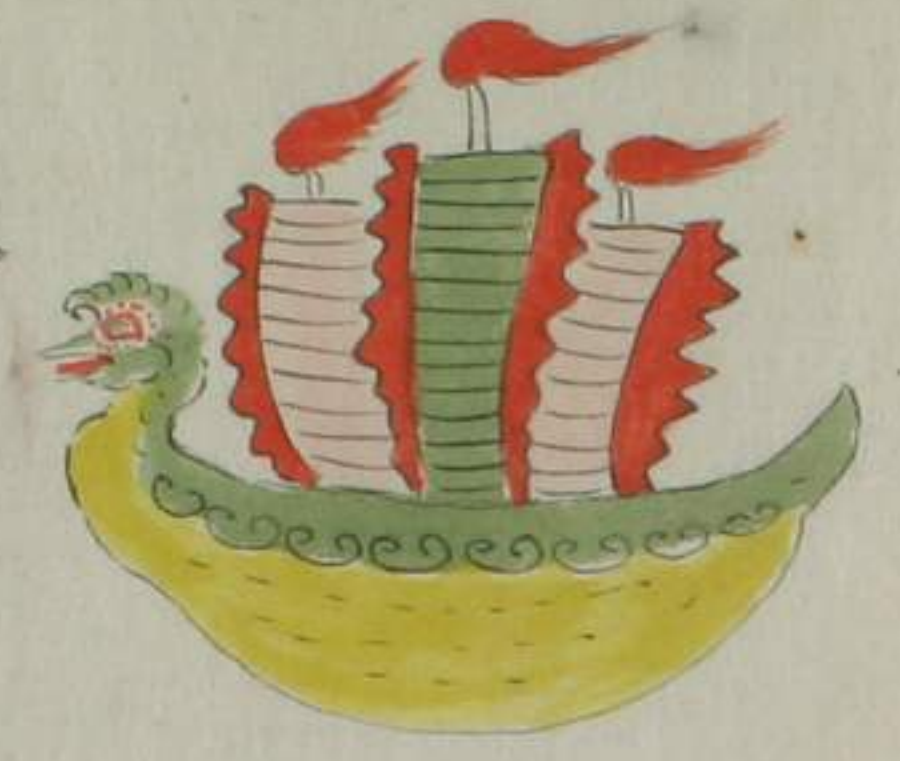


右に云々雷鳴日光星々の勢あはれも画キくは是あは
 こして驚くまはとあり打語と少しいるくされも大方ハ
 何と百五十貫目の筒と云夜も分ハ草

一草亭



唐船



龍



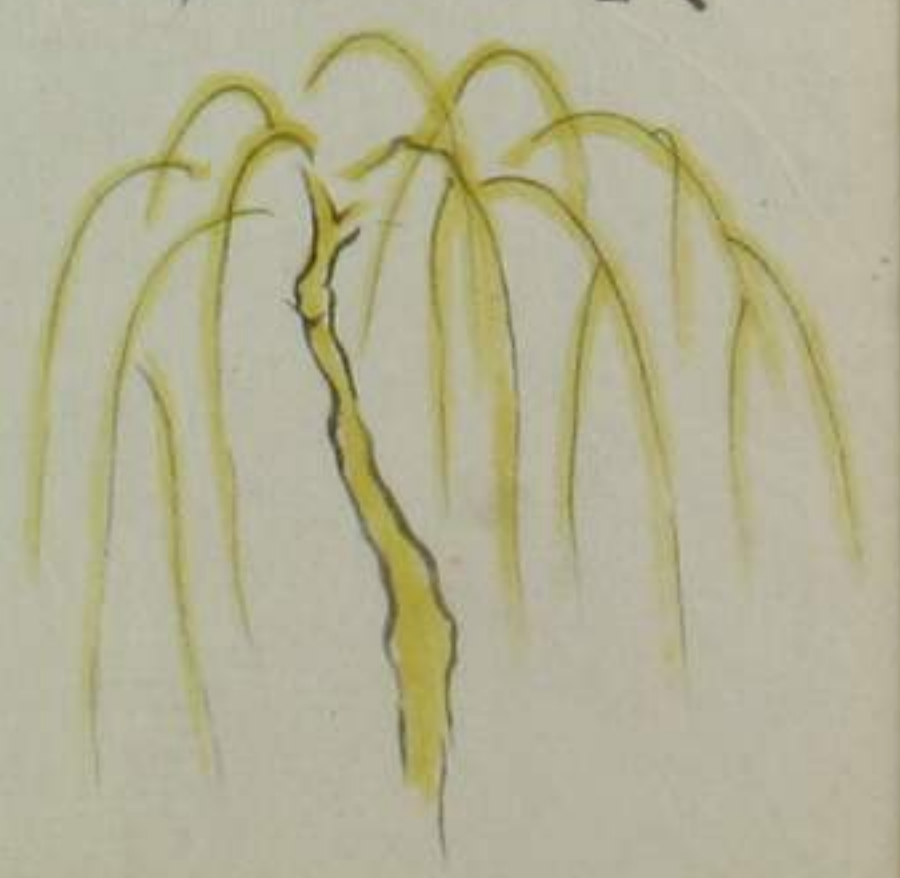
虎



福祿壽



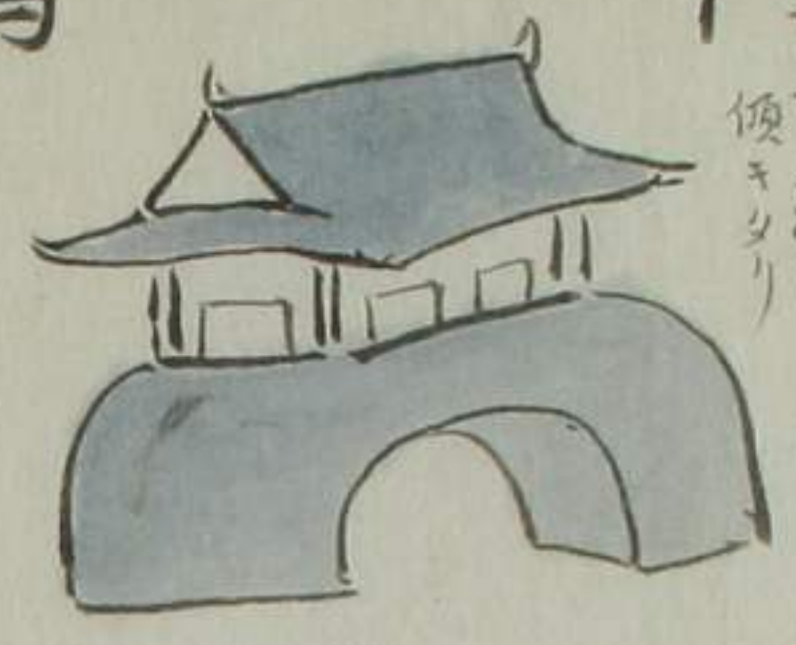
黄烟木柳



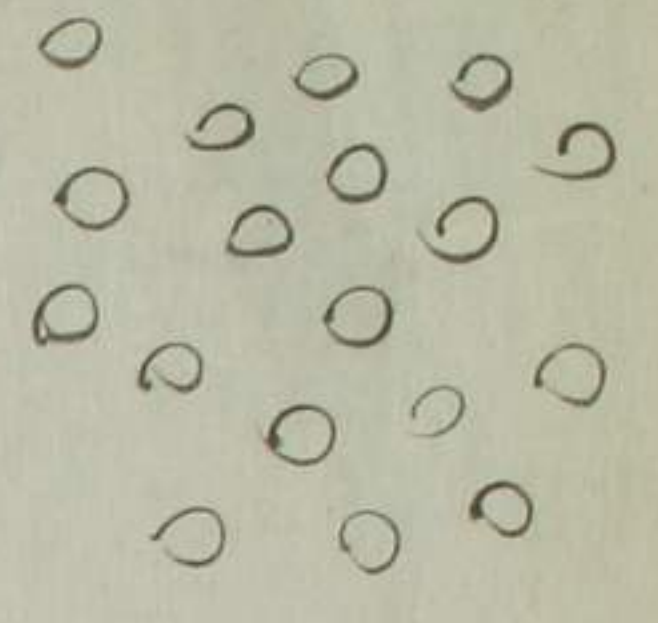
双鶴



樓門



群玉



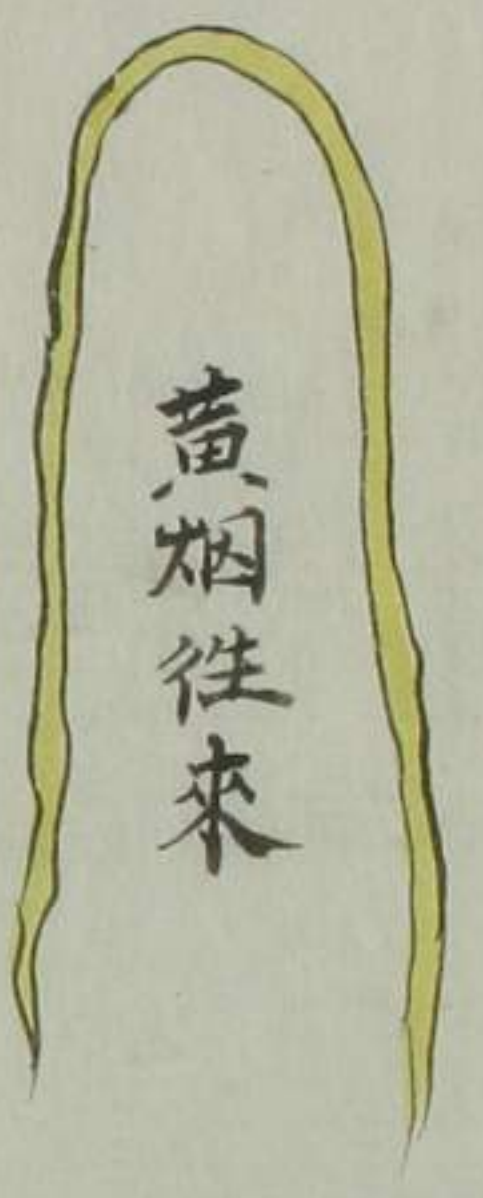
高琴仙人



船



黄烟往来



力士



黄烟柳



象



是ハ形と影ノ別ニ習リ一仕掛ニシテ福祿壽ノ
事ハ形ノ三四下種先ノ海中ニあり大サ目ニ多クあり五丈余
ニあり一ト貴ク也先年予幼稚ノ以テ少ク持火ノ信
事アリ因テ一ト心ニ留テ友ニシテ長崎ニ去
一代ニ交入ト覺事トヤ信ス

○長崎珍事

文政十三庚寅年一長崎奉行本多佐渡守家忠
西谷ニ寫

一通ヲ尋ニシ
揚リ居ル也

長崎ニシテ
本多佐渡守家忠

伊藤半右衛門

寛政拾年

一通ヲ尋ニシ
入室

一通ヲ尋ニシ
揚リ居

同ノ是種ニシテ

右ノ右ニシテ善堂業ヲ勤

為時麻布本松所

改工市店

海田越ノ御事

惣ノ御

二十七年

長崎遊女ニシテ為時在越ノ御事

善ノ袖事

たす

二十七年

同ノ是種ニシテ同家ニシテ脇屋ノ御
善堂業ヲ勤為時麻布本村所

孫善堂店

入字

一通年

揚り屋

間宮氏

十歳

三十三才

長崎三浦屋世傳 為时在十歳

り

二十八才

因入没所中 為时在是所月

文忠高氏

り

三十七才

長崎三浦屋世傳 為时在是所月

り

二十八才

入字

一通年

長崎三浦屋世傳 為时在是所月

文忠高氏

り

三十七才

り

二十八才

因入没所中 為时在是所月

長崎三浦屋世傳 為时在是所月

文忠高氏

り

三十三才

因入没所中 為时在是所月

り

一通年

揚り屋



右岡井信繁守及於以後宅山岳並高作及之在何處了
 長崎一版の種々の書面及び詩文の歌對多あり
 皆あつたり尤遺憾ありや

一通尋し
 入字
 二通尋し
 揚るる

長崎の山岳の故に對右並高作
 三十三
 菊藏
 源氏帝衣
 紅雲高方之故
 柳居草紙高作
 十六

物形由前守忠精領分領後國長是之在之北震
 之破損不異怪我人之數多也 同年十二月在知也
 書面到事

心日後法破之山然之倫前之知法領分領後不長是
 去月十二日地震言西浦内之破損所初山家中所在
 潰家山家日知是所死人怪我人之在之通

- 西布丸馬路橋向大破 一 法橋大破地形割 七ヶ所
- 西多門大破 二ヶ所 一 法川大破 七ヶ所
- 冠木山大破 三ヶ所 一 橋大破 三ヶ所
- 堀大破 五ヶ所 一 橋大破 三ヶ所
- 橋法石垣前 三ヶ所 一 柵大破 二十ヶ所
- 法守社破損 三ヶ所 一 法番寺藏破損 二ヶ所
- 田叔藏破損 三ヶ所

- 既破損 三ヶ所 一 役所破損 五ヶ所
- 西之地裂 一 藏外馬路破石垣前柵倒 三ヶ所
- 冠木山破損 五ヶ所 一 堀倒 九ヶ所
- 石垣前 五ヶ所 一 柵倒 二十一ヶ所
- 山端分位橋破損 三ヶ所 一 役所破損 三ヶ所
- 田叔藏 三ヶ所 一 山家中潰家 廿七ヶ所
- 山家中大破家 百九ヶ所 一 河潰大破 二ヶ所
- 河大破大破 三ヶ所 一 巨勢中河潰家 百十三ヶ所
- 巨勢中河大破家 三十六ヶ所 一 社大破 三十四
- 高岳大破 三十八ヶ所 一 法社家 三軒
- 新塚大破 三ヶ所 一 寺潰 三十二ヶ所
- 寺大破 四十三ヶ所 一 山端分所潰家 十五ヶ所
- 山端分大破家 四十四ヶ所 一 法橋下所大破大破 三十八ヶ所

藏所大破	七戸	一番所大破	二戸
高札場大破	六戸	御中決家	三戸
仁中大破家	四戸	仁中決書屋	五棟
仁中決書屋	廿二戸	仁中大破書屋	百七戸
仁中決雜草	十八戸	仁中大破雜草	四十五戸
田畑大破	九百五十五所 七反歩餘	道筋大破	二百三十三所
田畑大破	五百三十九所	樋水大破	二十戸
田畑大破	五百五十九所	用水溜池大破	四十三所
山崩	百二十五所	倒木	六百四十六本
落橋	五十五所	橋大破	七十ヶ所
信州川岸柵取	八百三十一	死人	四百四十二人
怪殺人	五百五十二人	驚馬	十六匹
怪神子	四足		

右の如く地裂山崩ありて、被毀地は、物あり、
 ありて、後、佛月寺、杉山、山崩ありて、右の如く、
 何れも、言ふ、佛ありて、長月、ありて、

十二月

○京師地震

今年正月
 改元
 天保

文政十三庚寅年七月二十三日、京師大坂伏見大
 地震、之の京師別々、活々震あり、七時あり、
 中、洛中、洛外、所々、中、勅人馬、怪我、狂者、
 皇太后、皇太子、御孫、御孫、御孫、御孫、御孫、
 戸板、之、安、長、神佛、之、祈、の、分、け、
 子、亂、ま、り、
 録者、
 出書院番木下、在、清、利、亮、

奉安記より又肥後の藩に永年伊水江入の形
を細密に画し予是を以て一覽之謬事
予が旅人江入の形詩三篇をその別集に安んじて

田中

旅人名所大畧在り海

澤成親方

正使

副使

譜儀官

樂正

儀崎正

掌翰使

正使使護

副使使護

小録親雲上

伊舎堂親雲上

儀間親雲上

兵那親親雲上

與儀親雲上

玉城親雲上

浦崎親雲上

讀谷山親雲上

真栄平親雲上

池城親雲上

小波藏親雲上

貝志川親雲上

内間親雲上

城乃親雲上

樂童子

濱元里之子

藩久却里之子

宇原里之子

富永里之子

小浜里之子

贊後使

術名波親雲上

佐久川親雲上

許田親雲上

知念親雲上

比嘉親雲上

濱元親雲上

嵩原親雲上

立津里之子

名嘉地里之子

安室親雲上

當嘉親雲上

比嘉親雲上

國吉親雲上

大工廻里之子

貝志川里之子

田中親雲上

泉水里之子

供旅人

屋敷比羅登之
古波鏡鏡登之
龜濱鏡登之
仲本鏡登之
岸本鏡登之
新垣子
長田
吉波鏡登之
城間
比嘉
東恩納
森田
杉田

高原鏡登之
志保田鏡登之
池原鏡登之
宮城鏡登之
崎山子
杉田
山本
宮里
崎山
志保城
安里
安仁
仲部

路次果人

當
高良
伊豆川
比嘉
ク免友

屋良
瀬底
高良
新垣
宮城
江田
古波
石川
金城
玉城
ク免友

心上

旅人の和歌知音のより数多贈るはさうさか
高休方ちかき信り畧はる中あかたつるもの
一二つをみる

わづはみの花さうめて日の本地

わづはみの花さうめて日の本地 豊見城王子

或の庵野花を笑し古く

いそぎ雪花軒がひざり 澤岷親方

めしきき雲由の客うそ山の雪 松平大福守

花のあけ戸のいろさけりりり 澤岷親方

また旅人の和歌知音のより数多贈るはさうさか
又旅人の和歌知音のより数多贈るはさうさか
又旅人の和歌知音のより数多贈るはさうさか
又旅人の和歌知音のより数多贈るはさうさか

旅人而着る後新時体是る中 城三起九杯の禮
とけし又樂童子管法はる山 拜禮 出之家老若回
勤又由暇中城○旅人往來し常ハ之 路の師江入
の形勢のめ 国土有る一日言 繩榮翁反と高殿白
はる白金溪の反と高殿白 仰しと管法舞樂あり予ハ
白屋為あこまりし時 終日見物あり 且あつるまをさ
望十月十日夕刻 薩屋あり 見物の強れを昔ハ交り
細キ紙丸の中 信の字を管法あり 聖はる早船分お宅
しと廣尾あり 薩破氏ハ之 越 回るうて 薩屋あり 到り
門そ在り 強れを渡り 史ハ 足 強 業 由 して 廣 尾 あり
到り 薩屋あり 茶屋 到り 新時体是るハ 茶屋
池に臨みて 尋常なるハ 此ハ 茶屋 裏よりあり け
しと見物し 大小名 数葉を分つて 史ハ 見物あり 茶屋

數百人の招待申良久、後山夜庭中を巡り、
茶室の毎又立寄、拾取る予が居、
十有餘、經二万、
後山の射人入り、
唯を建、
あきめ、
庭つ、
三四所、
別、
見物、
大石、
後山、
旅人の、
是、
大丈、
あ、
四、
建、

け中、
あ、
後、
射、
敷、
備、
射、
次、
正、
右、
書、

史くさう樂童子も薩人とおまゝりて路事やう史が管絃
舞樂をやしき舞樂中府中より親重と樂者めりて
書をかくもさうけ時の琉書予に薩人分りてさう
琉人歌の書数ある通

踊組
琉踊

一 團踊 ウチハ ヲドリ

立津里之子
崎山子

二 魔踊 サイ ヲドリ

名高地里之子
渡慶次最登之

三 笠踊 カサ ヲドリ

立津里之子
崎山子

四 馬代治口説 ミヨ ヲサマルクドギ

名高地里之子

五 打組踊 ウチグミ ヲドリ

立津里之子
崎山子

六 打花鼓 ウチハナカ

城間親重
徳田親重

徳田親重 大相公
城間親重 老公
立津里之子 老母
許田親重 管家

七 和番 ワラバン

國書命
漸名波親重
名高地里之子

判書

八 四ツ踊 ヨツツ ヲドリ

梅香
崎山子
渡慶次最登之
同
層高比親重

九 節口説 フシクドギ

立津里之子
崎山子

九 柳踊 ヤナギ ヲドリ

名高里子
崎山子

用意
唐踊

十一 朱買臣

朱買臣
池田親重上

老母
名高里子

童子
名高里子

同
崎山子

長班
唐踊親重上

伎夫
渡邊源次郎

皇親
崎山子

名高里子
崎山子

用意
唐踊

十二 切草の踊

名高里子

崎山子

下り口説

名高里子

用意

唐踊

借衣靴

十五 風箏記

伏元
渡邊源次郎

二目
唐踊親重上

小旦
名高里子

梅香
崎山子

宿相
許田親重上

都立十五番

相公

徳田親重上

娘子
名高里子

同
名高里子

小味
崎山子

朋友
名高里子

同
渡邊源次郎

右の流唐踊始まる以前より管絃之度ありしが樂忌ハ
何れやある不敷多ありしが是れを去る見極めぬを推
考して大畧として大樂忌の因委細ハ聘使畧に載ス

後山反生及より口石籠隔て正面より始る

一
 架鼓 里こ子
 洞鼓 里こ子
 同 里こ子
 相思板 里こ子

二
 三絃 里こ子
 四絃 里こ子
 胡弓 里こ子
 同 里こ子

右尺の後、唄吟の樂人共入生

右尺の後、唄吟

三
 架鼓 里こ子
 洞鼓 里こ子
 四絃 里こ子
 月琴 里こ子
 三絃 里こ子

上三意見分々カクシサドニ四絃月琴二絃ニ類マリ

簫 里こ子
 横笛 里こ子

右五人のうらうらと親雲上らうらうら者五人皆小拍子尺を拵り列せし
 管絃の合や拍子尺を拵り五人同言り唄の唐歌を叙せ
 三度の内管絃お海下出り琉唐の踊を始るも十番
 目節口説強々新時体息ス夫が又管絃三度あり

一
 架鼓 里こ子
 洞鼓 里こ子
 同 里こ子
 相思板 里こ子

二
 洋琴 里こ子
 三絃 里こ子
 三絃 里こ子
 胡弓 里こ子

右尺のうらうら唄吟の樂人皆入

唄吟 里こ子
 簫 里こ子
 笛 里こ子

三			
提筆	三絃	四絃	二絃
里こ子	日	日	日

右の形に似たる樂器あればとあるは胡琴也

上の五人の後、三人の
列せし拍あを打
唱し唐言の一曲お解り
ある里こ子五人退て又別
の樂器を打あたる通り

胡琴 三人
三絃 五人

右三人後の六人再び管絃と始し折し趣合の前
ありされし唐言をも多しを遺憾の事あり
三反し管絃終り又唐言の踊と成し十五番全く
お解り後三人唐踊のめきお言ひ捧と拍り踊る

是より唐舞あり 架鼓を司る人左より鼓子を打ち右
より拍を打し趣する九拍と下の右鼓を打し又八拍より拍を
拍り九拍と合を打し或は左より挿板を鳴らし
右より九拍と拍を打し其忙役あり
右より拍を打し其拍の節は拍
樂人三人後の六人再び三絃胡琴笛の樂器なり
されし似たる樂器多し多し右三人同言し嘔り
以舞の拍り唐言の拍あり時々樂器を打し
拍あを打し唐舞の合の拍を打し一々樂人を
まゝに唐言の趣合し唐言を打し多し多し
其意は唐言の拍あり唐言の拍あり舞人
唐言の拍あり唐言の拍あり拍あを打し其の拍あを

打と列と 折子と 有て多しうて 花小僧は是と 折子
三人の集へ 管絃と 唐酒の時 集へ 折子
折子 鉦と 琉人の中 名嘉地里の子 賜は
名人 身のあやうを 吹ふ 名の中 良夢
者 有三人 名は 志まで

右の管絃 舞臺果 以て 名揚 及ひ 再交 以の
茶事 入りて 賣茶 拵吃 折厨 有 予ハ 出
御家 あり 琉唐 舞を見 其の 美は 予ハ 幸ひ あり
管中 あり 管絃 あり 中 あり 踊り あり 是ハ 薩摩 産の
名 あり 限り あり 琉人 洋留 中 薩摩 産の 命り あり
薩摩 中の 少年 とい 数人 あり 踊を 習ひ あり 是ハ 琉人 踊
後 薩摩 産より 追親 の 大名 へ 奉り され 踊の 形跡 あり

きしとあり 〇予右の踊を見物の後感心なるや
また 関書 の ひま あり けり 任せて 書き あり
折子 あり 川柳 の 数多し あり 皆 列集
あり 留ま あり あり 男 あり あり あり あり
川 あり あり あり あり

賛名嘉地里之子

琉人 音楽 画堂 前 中 有 一人 美美 少年 薩
踊 和番 御代 祝 一 緩 一 急 儼 蹶 々

趣薩州君莊館觀琉人管絃踊

君不知今度琉人踊。我到薩戾成看官。
觀是不些又近處。自朝迺晚十分觀。
此事決而不寓說。若思寓言說來由。
抑抑琉人踊見物。早朝出宅趣薩戾。
已到朱門出檻札。不持檻札不能行。
從之關吏為案內。誘引廣庭泉水傍。
泉水傍有一茶屋。此茶屋則号藤屋。
前臨池水後添山。山路羊腸列樹木。
如是茶屋處處在。園中瀟灑不堪幽。
層冰融處接雙鴨。亂杭並邊繫小白。
暫入此裏憩居處。追追集來見物郎。

各待沙汰坐還久。稍及退屈喰弁當。
其中小吏漸知來。直樣各趣看官場。
此場人數爪難立。進先閑窺舞樂方。
數十毛氈敷拔椽。定級幔幕掛梁簷。
群臣交袖連高殿。高殿四方垂竹簾。
竹簾垂處置看者。簾面畫成青海波。
遙望粲然如帷帳。此中見物女兒多。
庭先別構看官所。此處何連大小名。
案內引吾臻此場。此場間近見分明。
良而出來琉球人。正使副使掌翰使。
銘銘拜謁画堂前。拜謁已終坐右侍。

言詞不異和人語。不用通辭委細便
其裡樂人追追出。列坐正面始管絃
管絃拍子最奇哉。樂器色色有數品
架鼓銅鼓響鑿鑿。長笛短笛聲凜凜
二絃三絃又四絃。胡琴洋琴旦月琴
銅鑼擊拆打和是。時時有唄皆唐音
唐韻不分拍子好。其餘音樂樣樣在
一一相濟皆引次。從是樂人柴東改
柴東改閑始舞樂。舞樂所謂琉唐踊
琉唐踊至多番數。踊之形勢又別種
舞人多有親雲上。又里之子筑豈之

妙手每番皆有。名番附見處少無違
團踊笠踊節口說。和番四竹打花鼓
其餘色色盡秘曲。十五番組濟十組
十組已濟暫休息。自之再度百管絃
管絃終又成舞樂。急急緩緩儻數篇
下口說還朱買臣。借衣靴或風箏記
奇兮妙兮噫奇妙。他所決不出來事
琉踊成時有絃歌。唐踊樣樣詞懸合
詞懸合兮皆唐韻。唐韻叭叭難聽納
雖難聽納分其意。錦袍繡袖彩色新
著冠戴帽或挿簪。况還好男一兩人

○美濃地震

天保四年 癸巳四月九日午刻 予より大地震ありて同日十三日酉刻迄 晝夜止時あり方八里より方池田山行山村 菅野寺村 仁王山白権現板や村板木村久世川邊 呂久川邊 赤坂高國寺 山布社岩南宮山七堂伽藍須臾崩落長谷川より崩れ村より山崩れ地割し泥砂を吹おし男女も牛馬倒死怪我者数多あり城下所承の人より往還し戸板又いぬを扱ふ者あり清中地割れ地割れは又怪我多しと云他は神類も多し天喜あり右地震の男と云國に擧げて喜劇せり予も國をなすに日高尾園ありけり張主の只も大男と云ふを 徳川より知言る事執事あり知張 他皆又妻詠ふべし録すべし

○流行篇

文政八年之比或人之戯作也

捨子嚙休三子生 駱駝談盡蟒蛇盛
 延壽最期町内惆 宮戸頓死坐中驚
 藤八五文尤奇妙 笹雪六銅益流行
 請者西國神事舞 評判高自千本櫻

○七娘 二月寺安張る所の流放言

一月寺と云る 六十日の災辰 虚言傳と云る 浮城正有と云る
 料理の二階 七娘と云る ち橋と云る 火の子と云る
 樽下と云る 言ふてん物 ありと云る 飛人と云る
 馬使馬と云る 自火の云上 評判

在神女のほろし何下の朽塔邊を燒てありして切結し
 初ハ平家も是れ源太帝が少孫ありて自てこゝを
 又一時何事もされは信之帝が孫をみて右の脇腹を
 と突く信之帝もまじひをいふと源太帝彼孫の刀を切伏
 ても年のあはれを違へて相存の助太刀の源太帝の孫を
 ちまたに世女お忍へてあるを先づ源太帝の孫を先
 此時お忍へし神の返り討に成る跡を申ひては新
 お忍へし心算りせし御共ししと聊めりし源太帝心中
 甚好して唱承と申し是れお忍へし源太帝を勵ませし唱
 婦ありてありしとありしとありし

周知作

福圓源太帝 ホ 十八

遊女お忍へ ホ 二十七

勅賜

意井信成帝 ホ 四十一

け敵討の中実正定もあつて先年しし書留
 より遠州のへし過りて相承細年知の追跡を

○流形放言

コ 大利家 於頂魔	奉齋念惠天守護之所	南 樂 山
レ 呵伽羅 於尼光		平 良 寺

讀法

米加百二六合カウコレ寺良平山樂南所之護守天惠念祈奉
 光尼於羅伽呵魔頂於家利大
天保四年癸巳比世上米穀尤高直

立身昇進丸

一稱出世藥

大包	金百兩
中包	金拾兩
小包	金拾兩

- 一 此藥、諸病に用て功能あり申ゆへ、幸と家醫者後、又、寄合或ハ小善法入三股、退居、侍、曲、小善法改とて、幸、善、病、先、あ、度、月、日、一、早、速、切、茶、力、有、者、事、神、の、と、
- 一 何、と、申、判、別、あり、れ、付、あり、て、自、の、と、申、病、中、包、を、お、折、時、候、見、過、と、お、色、の、言、物、を、賜、へ、一、必、也、申、内、功、能、あ、ら、れ、病、三、引、不、腹、也、
- 一 此、と、申、味、お、對、善、と、申、何、年、も、病、治、ま、る、能、し、心、取、

此、と、申、味、お、對、善、と、申、何、年、も、病、治、ま、る、能、し、心、取、

此、と、申、味、お、對、善、と、申、何、年、も、病、治、ま、る、能、し、心、取、

右、と、申、味、お、對、善、と、申、何、年、も、病、治、ま、る、能、し、心、取、

- 一 勤、と、隨、方、骨、折、と、申、老、角、役、付、兼、り、病、を、り、つ、て、馬、場、と、申、り、
- 一 急、キ、心、病、と、申、成、病、と、申、り、
- 一 澤、瀉、尤、肥、後、の、因、 奥、女、丹、い、梅、茶、坊、茶、を、用、い、ま、い、精、力、善、也、事、々、終、功、能、顯、り、ま、す、 陽、后、散、い、愛、葉、白、湯、
- 一 也、年、と、申、藥、多、く、信、と、申、て、善、法、を、り、方、多、く、隨、方、を、入、し、

右、と、申、味、お、對、善、と、申、何、年、も、病、治、ま、る、能、し、心、取、

例、あ、り、ま、す、申、ゆ、へ、申、切、神、の、と、

但、三、年、か、り、小、善、法、入、七、年、の、百、三、

此篇世に流るる法言を考証し、其の對するものありしを
今を以て考方用ひてし物

當時禁物

古風 異風 蕪通 理屈 高振り 言慢 負文
出嫌 二麻積

右馬場馬場の内い望く馬場之に物隨ふ馬の廣く
らひの馬のけさるる於包紙に考証記置す

文政年中吹習

後友

黃金齋製



右賣弘和目下表に控向知るる然るも也

天保五年甲午秋日駒山ヨリ借写

三

一 諸國 統

去年火案湯

一 赤一お湯乃の湯を引下す
一 世にれつゝさるる
一 上をさるる下への痛を和す
一 借讀氣の法
此を金庫考へて其考を別す

禁物

二百十日音 八穀之分風を志むる列々云
合々

世界一版六十四州又

大方安堵音町

安井米穀製



高賣米の町師

世野中辰 五六

一斗百文三軒通清色下ル町

嬉之屋 五七

調合所

賣弘所

文政十一年戊子十月十六日信齋先生分借字

柳堂馬進歌

四
嵐と枝を掃きぬきしつゝなまぬく神の馬使
天文と地の理を今齒するもそのつらつらあり老人
身とを投るいぬ主統とて周防の袖のまきとて
圓形とていぬえかきとていぬわたり腹のまきとて
上臨りゆきとていぬち地をまきとていぬ人こゝと怪神人
雲のまきとていぬ糸巻とていぬ水巻とていぬ
引ひの車い廻る輪回とていぬ人の胸とていぬ
籠の口巻とていぬゆきとていぬか増年時とていぬ
よつら駒とていぬ馬代とていぬやま役のつらとていぬ
柳の好いふとていぬ柳の好いふとていぬ氣まきとていぬ

天文方直播作左門柳堂、画回異国三渡に依り長崎
長崎時味中柳屋に齒う残ラス振々

所中柳堂固防中合年百人組頭松平主統因於丹波
上巻ニ口論依り時役 亦免

所書院番頭因致世服守藤者二件ニ主統上は論
時役 亦免

若年寄宗極密外丹波守主統重士時格有キヨ馬牧
ニ懸其時味時味時味時味時味時味時味時味時味時味
居り候にたり

水野村三州守西尾馬老中松平伯耆守京都詰司代

所幸植村駿河守平水野村守上屋五音

所幸水野出羽守以常賄賂類り増加交々及つ筆以
青山下野守以時神亦増加

所幸香取守下総守鎌倉鶴ヶ岡守名代

天保二年辛卯八月廿一日ヨリ三日之間於壬生寺奉納太字如左
天保二年正月七日葛分
或老人狂言

五

此節経教の意の情のあらむ事候りや或人候り
枯槎法深を鼓一中で隠居か金りわの布衣の情のいふ
年の息くくく揺れ下心意の情のいふくくこの呪

天保六年正月七日葛分
或老人狂言

三條不忠
書きや
か割り別
命と入るべし

将武がれこの長木せむぐも浴上
作やとん動りせむ中位いじいものいまもも将武

○不退堂大文字

天保二年辛卯八月廿一日ヨリ三日之間於壬生寺奉納太字如左
とんい人堂方の落胤ありしつり於寺のてり白袴と名して中めし

ようん

千畳巻紙 縦三拾間 横拾七間



筆長二間重サ指六寸目

墨五石三斗

いふ法ふして大文字と書し不退堂を門中姓名を掲りしを起言
のそりしつりたんいん

文政九丙戌八月廿一日ヨリ三日之間於壬生寺奉納太字如左

初日

三百六十畳
百二十畳

岩屋山賜慈志明院不退堂先生
丹州宮川村園本宗徳

六十畧
百畧
七十畧

中日

地勢五十畧

五十畧

五十畧

五十畧

後日

單書五十畧

五十畧

同所
京兆
同

穆如堂
臨地堂
濂口堂

江戶

小谷三志

浪華

中村慶行

京兆

西池照房

南都

室川福秀

京兆

玄臨堂

同

大雲堂

五十畧

外書五十畧

變體五十畧

右之分十畧大字數多

不退堂先生二筆百畧書展觀

文政十丁亥歲九月廿三日之方大坂於天王寺奉納大字如

左難波小寺一岳瑞孫君不退堂門人中

初日

五百畧及大字

賜紫不退堂先生

百或拾畧大字

舟場

玄積堂

同

鳴之内

龍泉堂

六十畧及大字

天滿

小山吉十郎

同

井村茂濟

同

森川旨武

同

頭照堂

六十景及大字

中日

戴百景及大字

同

六十景及

同

同

同

後日

七拾景及大字

二枚

不退堂先生

右同日不退堂先生之筆百三十余紙書展觀

十三童
渡屋橋 菖邑熊系

安治川

生玉任

澗川丁

十四童
高津

石橋莊助

廣橋利常

三河油島

長崎五湖

天満任人

鳴之内任人

天保二年丙午三月廿四日 勢州 於射和川 太神宮奉納大字

百景及大字

六十景及大字

右不二字書奉納數多

射和

井上松齋

十三童

富山弘道

○ 神田橋分報離言

天保六年乙未七月十三日夜神田橋分報婦人父の彼を討つ
其神との同尋あり 去る冬乙未十二月十日 於酒井雅樂家
末山本三郎の 小中石巻とて 同家申の名前を 御金
用の借書と持寄り 三石巻の 鏡に 心中之疑ひ 而
て 毒を 飲断とて 後分あり 切舟 斤脈と 切舟 三石巻

やの... 坂所... 紀伊... 河成... 陽直... 人形... 大入... 勅平... 居接...
あひま... 坂所... 紀伊... 河成... 陽直... 人形... 大入... 勅平... 居接...
あひま... 坂所... 紀伊... 河成... 陽直... 人形... 大入... 勅平... 居接...

あひま... 坂所... 紀伊... 河成... 陽直... 人形... 大入... 勅平... 居接...
あひま... 坂所... 紀伊... 河成... 陽直... 人形... 大入... 勅平... 居接...
あひま... 坂所... 紀伊... 河成... 陽直... 人形... 大入... 勅平... 居接...

新のまゝ 因るぬ息神と感ひし
 白くは 股
 の白くは 時余の心も 魂の
 まるくは 史の
 るは 櫛の 櫛の
 親類もあ 及り
 年あがら 珠
 別して 相
 流りく 爲
 なる

古の心 筆の心
 心

和久注解

人との心 年あがら 珠
 別して 相
 流りく 爲
 なる

小の心 種故

芝流馬

高砂原本ある山
 人の鼻と 枕と切

純正な新の

是の純正な新の... 是の純正な新の... 是の純正な新の...

阿武松横綱

長州松平の国友初め小柳春五帝と... 阿武松横綱... 阿武松横綱...

古伝死人形

あ違某の巧みの相言... 古伝死人形... 古伝死人形...

花鳥茶屋の格

浅草両馬茶屋の花鳥茶屋... 花鳥茶屋の格... 花鳥茶屋の格...

釜湯煮

釜湯煮... 釜湯煮... 釜湯煮...

大男

是の細川柳... 大男... 大男...

左馬ま方丈

是の左馬ま方丈... 左馬ま方丈... 左馬ま方丈...

鬼娘

何国々... 鬼娘... 鬼娘...

川崎和尚

川崎和尚... 川崎和尚... 川崎和尚...

鼻切

鼻切... 鼻切... 鼻切...

女中巧粧

女中巧粧... 女中巧粧... 女中巧粧...

柳柳

柳柳... 柳柳... 柳柳...

厚羽織

木履扱ふと枝棚と塗区よりけり捕へるも残らん時石と竹炭
土氏信信公承の老居の面を強かんまじり

けり流石の事数多ありと云々皆これより右の粗多と云ハ仕年
其の遍く人々相と漸くて未八月十六日五川辺る本村より居りし
惜しき

○狸の噂

天保六年七月の比狸二疋江戸へ来りし噂を頻り
異説區々として定めず予々知言する目黒辺の住友永井
右左衛門の言を以て其の細事諸條ありと云り其
書たれと

豊前國宇佐郡小浜村百姓とて漁師と云ふ善助と云ふ者の
あり兄ハ文政八年乙酉うま生岩八と云ハ弟ハ同十一戊子
年うま生岩八と云ハ其の父も其の母も赤く異体の子
と云ハ其の父も其の母も赤く異体の子と云ハ其の父も其の母も
事争ひの事あり別々として居りて其の事ありて其の事あり
善助も老病して同十二年己丑六月二日死せり其の信て善
助が弟の善助と云ハ其の弟の善助と云ハ其の弟の善助と云ハ
其の弟の善助と云ハ其の弟の善助と云ハ其の弟の善助と云ハ

本所中ノ郷八軒所依助産
石畑三職石三職事周次方ニ為時旅

宇佐八幡宮神領
豊前國宇佐郡小浜村百姓とて漁師

吾脚悴 岩八事

櫻壽

未十一早

同人治男 岩八事

櫻美

八早

同村百性 吾脚才

若無法

五十五早

吾脚才

く に

四十五早

同村百性

汝帝於也

此方同方
記在表に取付の者

山八事 櫻壽

十二七早分長 此方十三四寸 又二尺六寸程 中国より
少く 瘦る方 顔少く 頬あけ方 赤毛長 廿三寸
白き方 髪身 眉毛 赤く 唇 廿三寸
色赤く 髪身 赤く 髪身 赤く 髪身 赤く
赤く 髪身 赤く 髪身 赤く 髪身 赤く
先ち 爪短く 爪の生る 爪の生る 爪の生る
言古より 調うて 早云の 方

山八事 櫻美

八寸早 赤く 赤く 赤く 赤く 赤く 赤く
長廿八寸 位 赤く 赤く 赤く 赤く 赤く 赤く



岩八事
握扇
八事



岩八事
握扇
十一事

乙未秋日
融山寫

永井氏より借寫せし全圖左の通り

右の画者歌山子布中ニ御有る在友某の子ニハ在友ハ永井
 氏の仲方且親友あり〜歌山元平画を好みて畧妙と傳へり
 岩八兄弟の孫有る在親宅に引て兄弟の容貌を圖画ヤと
 以て人として能く似たり〜別々兄弟の方似たりといふ

薩摩の落山林氏のより程々縋を傳へり程々の生血まで
 傳へりあり〜是ハ柳の虫あり〜
此の虫は至小出ハ柳の虫に似たり〜又虫と柳と
 生る方とあり〜虫と多くありて籠入蓋とて伝
 へられたる日あり〜此の虫は三年余と
 歴れい皆水より〜此の虫を製して傳へりといふ

或子の曰先年程々の毛を名たり
 あり〜也〜是子縋を洒ゆが忽ち成て老り〜是程々の毛
 あり〜所以と伝へり〜此の程々の事ハ異説區々あり〜
 實り〜流ハ及り〜或ハ山男の子と云〜又ハ河伯の子と云
 といふ也〜の事〜是れ〜と皆異なり

○百文錢

天保六年己未九月五日吉若年幸小笠原お授手及は後
 分馬書附〜回状ニハ分世と通し用いたる新紙有る後
 此方々長分方有るの紙ニハ蓋紙有る〜此方々
 あり〜此通る〜此通る月紙〜此文〜此通る〜此通る

九月

右〜海〜の箱籠

右〜回状〜も後〜等〜此〜得〜り〜が十月〜歌山の子

表

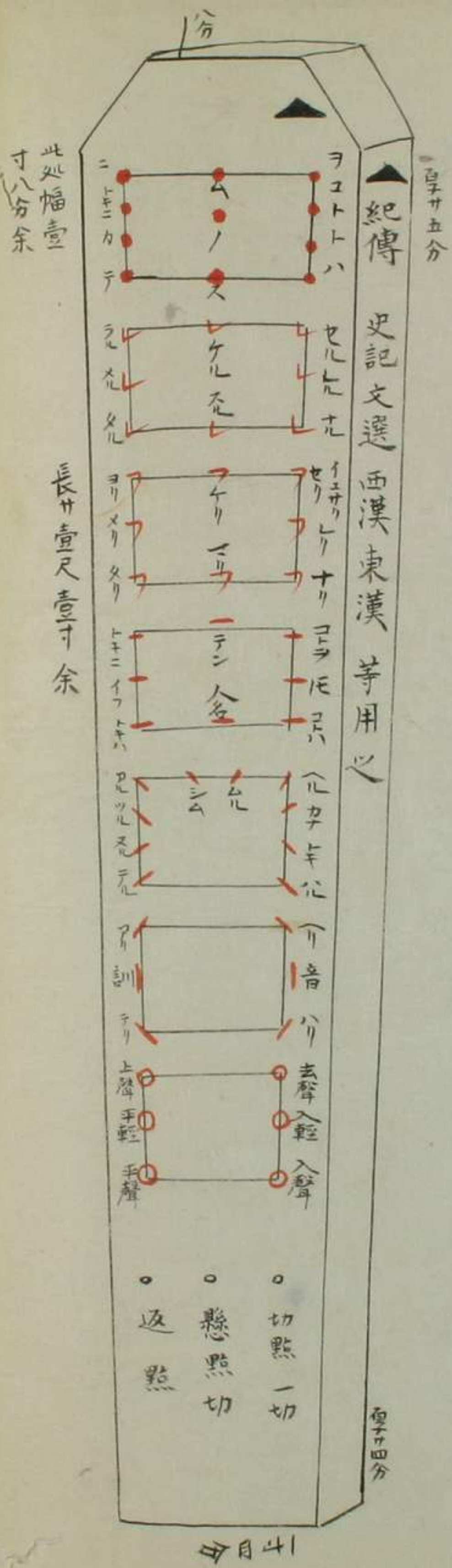


裏

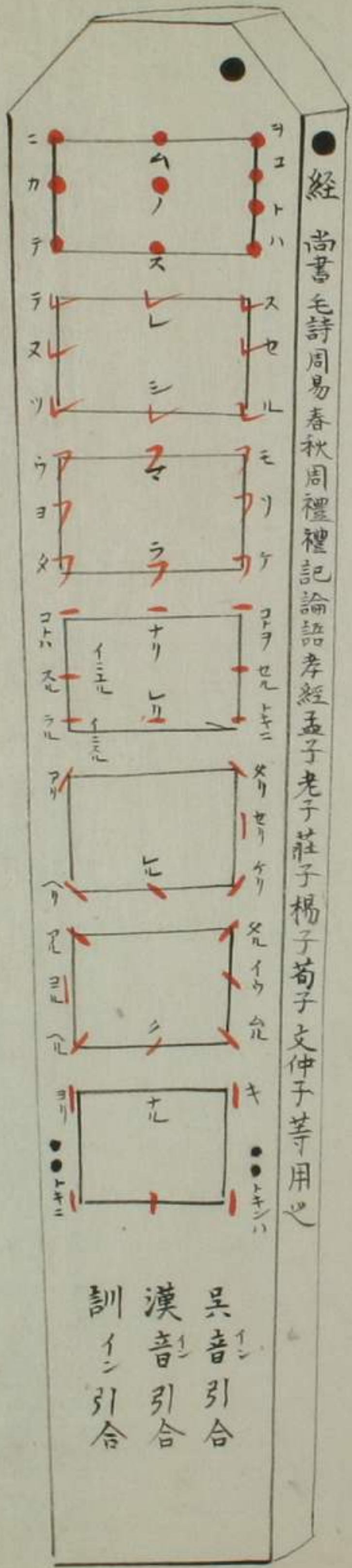


○乎古止點

天保三年冬十月七日在漢所居の茶室にて
 神部式錄助ノ人トシテ時日ノ秘苑ヲ寫シ
 乎古止點トシテ之ヲ一紙ニシテ信テ時時用之
 所ノぬ具圖ヲのめ一函在右の極ニ書セリ



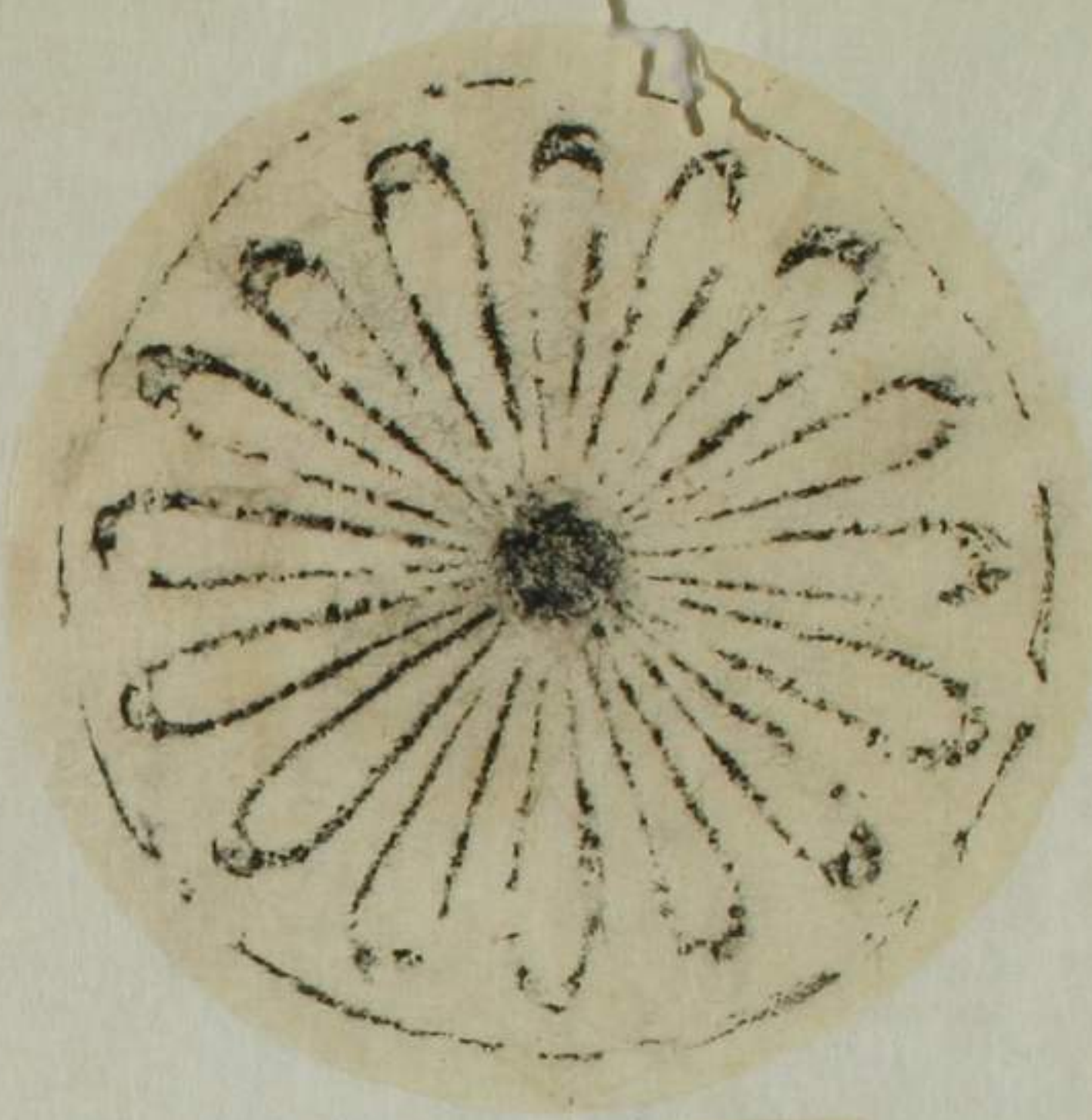
母目山



○古尾

浪花本教寺の古尾あり一人持事なり
 是天保七年丙申五月四日冒之書傳定あり
 其具形を抄りてある張垂りて撰考あり

是よりあり古尾のやうなり

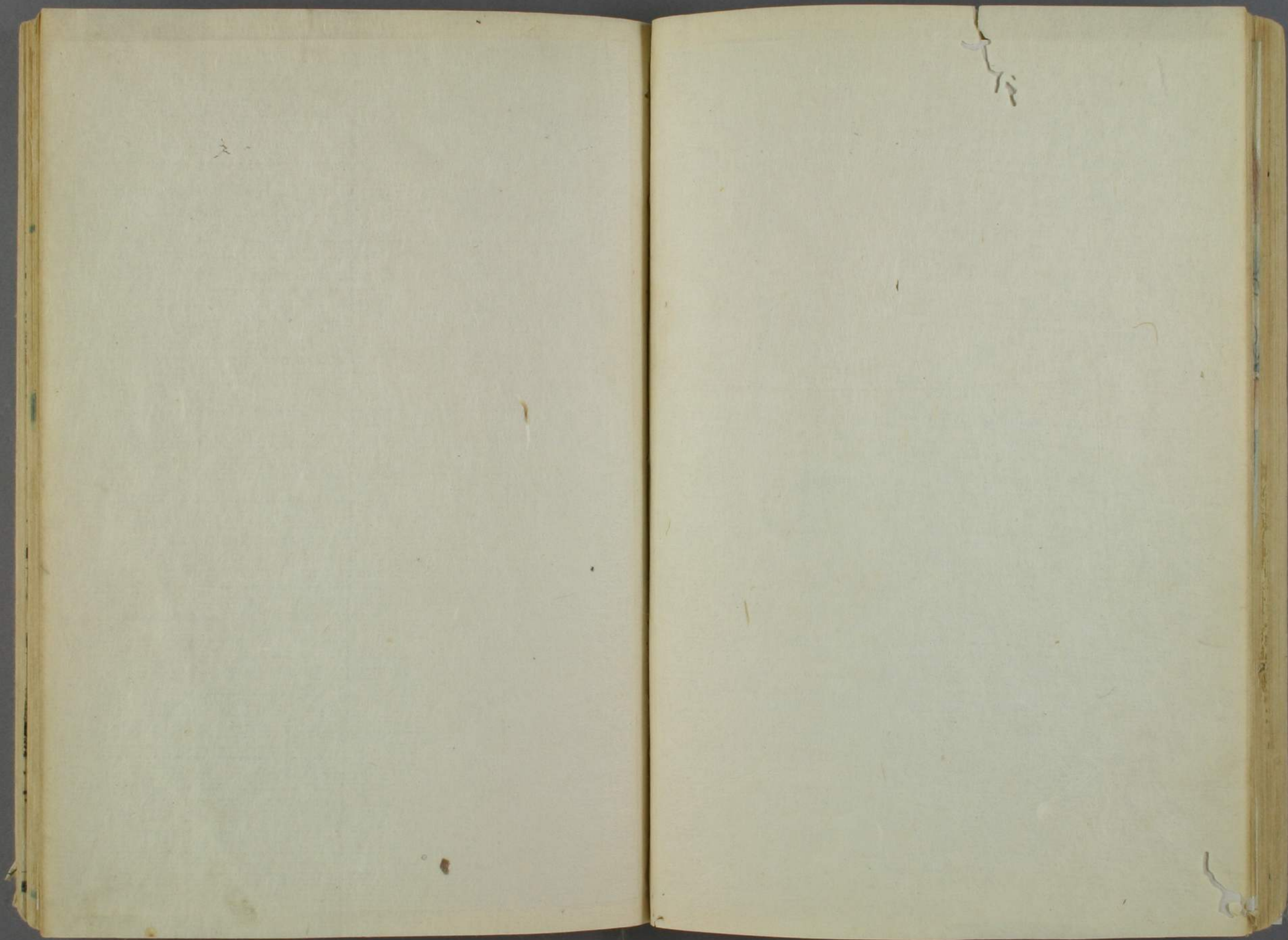


栲厚サ



○山崩家話

天保六年乙未十一月十五日夜九ツ時迄晴々静夜ありきま山下西門外依栢木町の番屋より湯屋の橋上一瞬の間に崩れたり左右の溝は少くも指を二階の下に陥りまき一藏、異事といふべし所中いふとあそび心は名馳せしま右の形跡ありて怪倒やと云々皆画々として或は通つたといふはけがれ又崇りありといふ同十三年東馬はまは行合目撃してけしきと云々是れいふはまありわたりあはれの跡をききん



松窓雜錄卷之二目次

水滸傳畧評

秋田落押葉摹本縮圖

豐太閣御肩衣

一橋珍事

降毳

神田仇討

堅物試

古印章

聖堂鬼杖頭鬼龍子之圖

麒麟之圖

由亭翁筆塚之碑銘

朝鮮名号

萬松山開帳狂詩

淺草珍事

延宝中吉原評判繪圖

札差行狂詩

釋奠詩卷

六寺改号

惟馬樂

古瓦



骨牌

芝海龍燈之傳

馴子舞

流行篇

困世御能番組

時疫除

唐土歷代帝都

擬融謡曲

後土御門自詠短冊

來舶美人之圖

救荒二説

○水滸傳畧評

天保乙未夏七月五日借字不箱友人伊勝の條
齊に書て至り下書也

水滸傳三箇の隠微あるを唐山ある文人学士の彼
書をいふものいひくをいふ水滸を評注するその巻
識を世に伝はせしむる金瓶李贄の如くあれをいふ予嘗
ていふべきありやうなり三箇の隠微は高時世にお現乃
妖魔の百十ある事又洪信と云はるは便是前後身王進
と史述する師弟一體なり又宋江の百八人の初め
力急急忠の之名ある事即ち是く予が彼妖魔の首領を
百十人ありといふ事第一回供大尉誤走妖魔といふ段より
那通黒氣直冲到中天裏空中表作百十道金光望四
面方去了と有りくはる當日供信の誤りて走らるる

二百十の妖魔那多法本に於ての百八人の高僧とある
時ある不三妖魔是は皆り似たり考ふに這二箇の大
妖魔をこれ奸險兇暴の事と爲すは其の事とて宋に天
下を傾けしむるもの一人ハ太尉高俅又一人ハ晁蓋是こ
の他の二八妖魔も但一人間り如現して宋の天下
を傾けしむるもの兇暴の中は於つて好前あり故に
天罡地煞の數に應じて自刑してその妖術を治め
竟し宋の爲に但一人を殺す事と爲すは其の事とて
晁蓋は其の兇暴あり天罡地煞の數に於ては其の事
魔光百十箇とあるもの一人ハ二妖魔を傾けしむる
高俅晁蓋こと
いふゆゑに此の隱微なり知言の發揮に儘なり又供信と王
進の前後とあり初ハ太尉洪信の石碣を覆て衆魔

を去り後ハ教頭王進の史進ハ武藝を傳へし妖魔
世に現るは皆り奸の事なり但ハ妖魔を世に傾けし
たるもの一人ハ是ハ一ガリ且供信と王と音通し信と進
も音通し是も音通し不信の太尉を信と名つるは隱退の
教頭を進と名つるは亦好ハ亦胡元瑞の所謂教頭也
その名を顛倒して押すは夜半に命をとり且其の事
場事と始り殘命をとりて汚穢漂はるる
命をとりて浄とありては其の事とて水滸の作者衣
冠を賦し草紙と忠義とを以て是はその名を顛倒して
脚をとりて之を金瓶の事評注の事なり數ある
ありは悖とありて其の事とて四ハ推量の臆説を以て
自有る事なり其の事とて是も易緯の事一毫ありて
其の事とて二十里の事とありて其の事とて王進と史進とを原

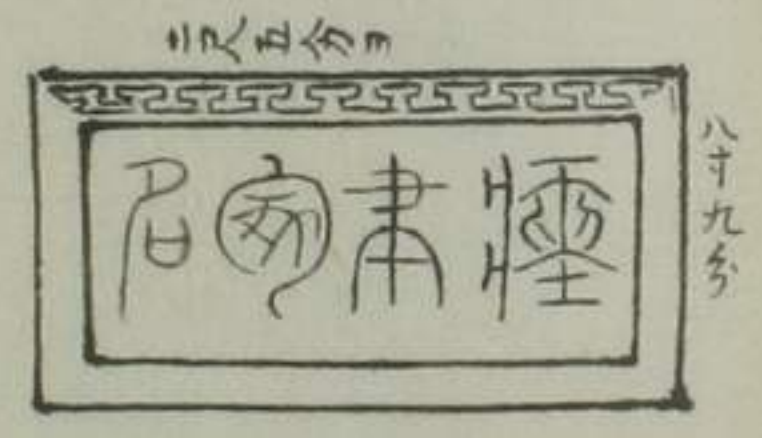
暇ありて海ありて九牛の一毛ありて作心の隠微を世に揮てい筆
 をあらしむる及て是れ水滸の作者と世にありしめて 皇國此云美
 土を人として何れとともも吾言千六百を多るるめや思へる鼻のう
 らめくまふ十藝秘藏の流たるを同好三の友とまふと名をそや
 とその日ありてむ壬辰年鼻月中流歎

荏土 兼笠漁隱

○曲亭翁筆塚之碑銘

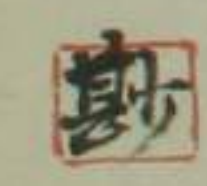
文化六年二月廿五日翁筆塚と云申新塚山々建碑銘
 と掲げしと惜り写入碑高五尺五寸幅一尺八寸石種之未詳

碑と云ふは日形名あり



此篆書文のより
 あり

曲亭翁者裨官者流也 義飾立根之車以
 醒里耳綴繫空之話以振恒心 雖戲謹似
 弄世頗寓勸懲焉 其所著傳奇小說大小
 凡二百餘種皆隨時尚而標其異 追世能
 而悉其變 今年新於去年 明年於今年 是
 以詞中構無數之幻縁 紙上現無邊之化
 境 一創一奇 百創百奇 漏天機者為不



人 人 之 意 匪 假 毛 穎 氏 之 資 者 二 十 年 於
此 噫 毛 穎 氏 亦 甚 勞 矣 夫 裨 官 睦 記 者 鄙
事 也 毛 穎 氏 勞 於 鄙 事 而 費 其 精 精 費 則
頭 禿 頭 禿 則 人 弃 之 既 假 其 資 而 弃 之 則
其 精 蘊 而 鬱 矣 豈 得 無 崇 耶 於 是 欲 瘞 其
枯 管 而 祀 之 中 山 遂 遂 言 歸 未 迨 因 留 殯
于 東 都 之 郊 舉 之 以 布 囊 歛 之 以 瓦 甒 庶
幾 永 安 于 茲 冢 在 於 谷 中 新 掘 山 之 上 乃
建 之 石 而 勒 其 銘 不 止 勞 也 銘 曰
若 薨 氣 則 無 不 之 也 無 不 化 也 汝 化 矣 則

將 奚 處 奚 歸 乎 問 之 無 聲 叩 之 無 音 汝 傲
昆 耶 氏 之 默 耶 抑 貫 中 氏 之 瘖 耶 瘖 乎 默
乎 吁 戲 乎 噫 得 無 箴 後 之 戲 謔 乎 於 是 乎
銘 于 石
文 化 六 年 己 春 二 月

鵬齋龜田 興撰并書
掖齋狩谷 望之篆額

碑裏
翁名解字鎖吉一稱馬琴曲亭其別號也
姓瀧澤氏江戶人世仕某藩為武弁之家

父諱興義性長技擊而射御之術無不悉
究其奧矣有子數人翁其季也翁以多病
故去而隱市其所著詭詞冊子巧寫憂樂
愁啼嬉笑怒罵之光景使閨人穉子估客
村農不能不為解頤酸鼻千般萬般之狀
是以名噪一時坊賈捷利者獲翁之新著
以為居奇而得其贏餘者有年矣今茲坊
賈等與翁嗣子興繼相謀而建之蓋飲水
思源之誼云

鷓齋興再識

右の文の下

立石幹録

木蘭堂	拍榮堂	平林堂
榮雪堂	方策堂	柏悅堂
雙鶴堂		

文化庚午首夏朔琴嶺瀧澤興繼立

右工松本策五

右七人其歲月文の下に列書せり 右二枚の石摺を
天保六年 秋望七月五日 義宣先生より 借寫せり

皐月歌奇別本の内

○秋田路押葉摹本之寫

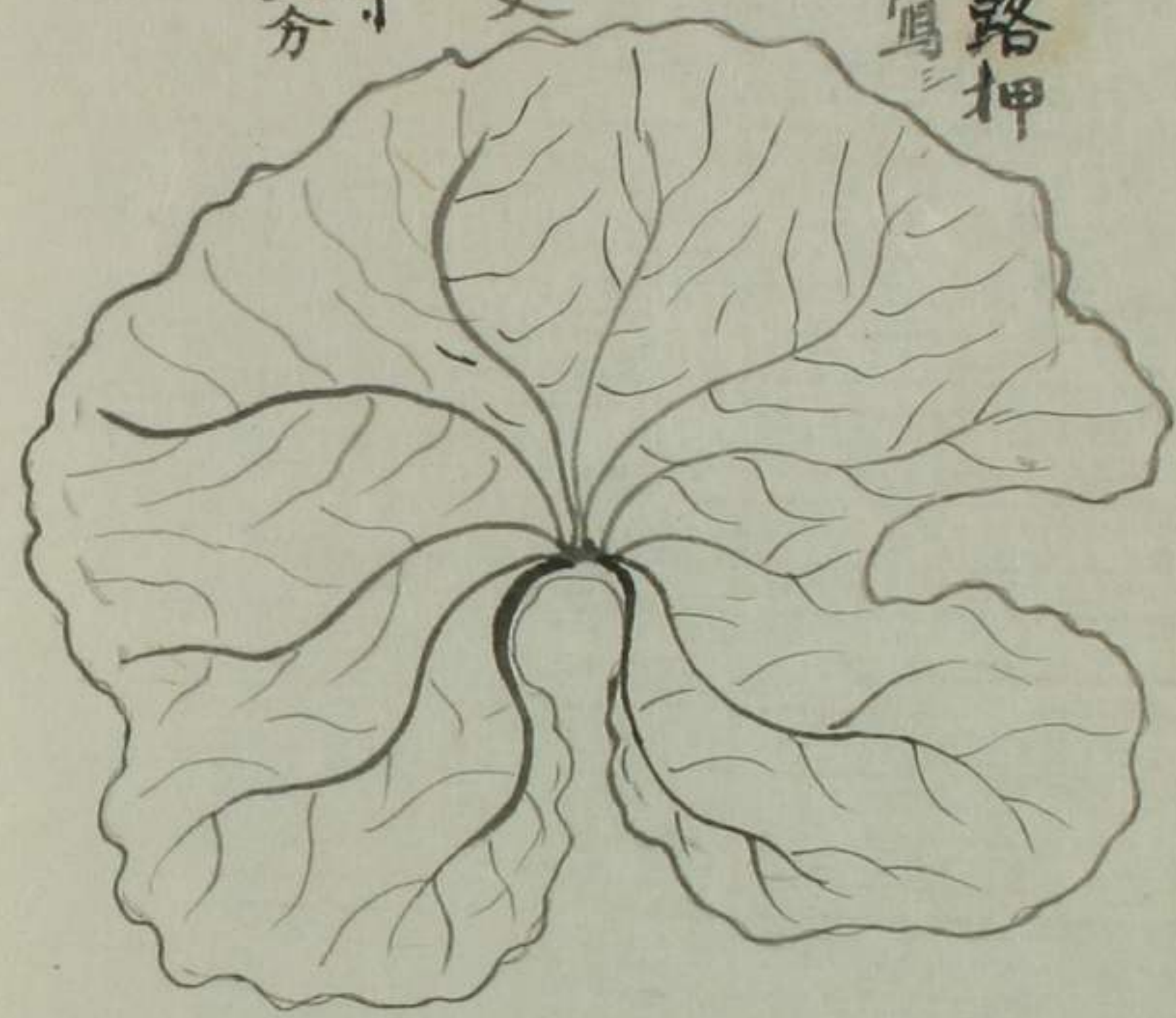
天保七年丙申初夏の比 著作者より 借寫せり 元年の數枚

台より依りて四角して其大方を編圓き是乎息尾其葉子
 筆より乙酉仲夏某日上書アリ

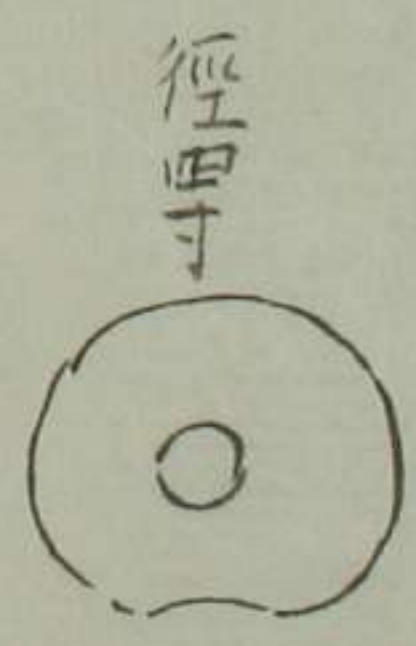
出羽秋田大落押
 葉摹本ノ寫

葉

周廻四尺壹丈
 零五寸
 徑堅三尺二寸
 同横三尺寸五分



莖根本



莖

高六尺余根本周廻壹尺二寸徑四寸受葉處周廻
 九寸徑二寸六分小大不一大抵斫而如輪者充碗中猶有
 餘云

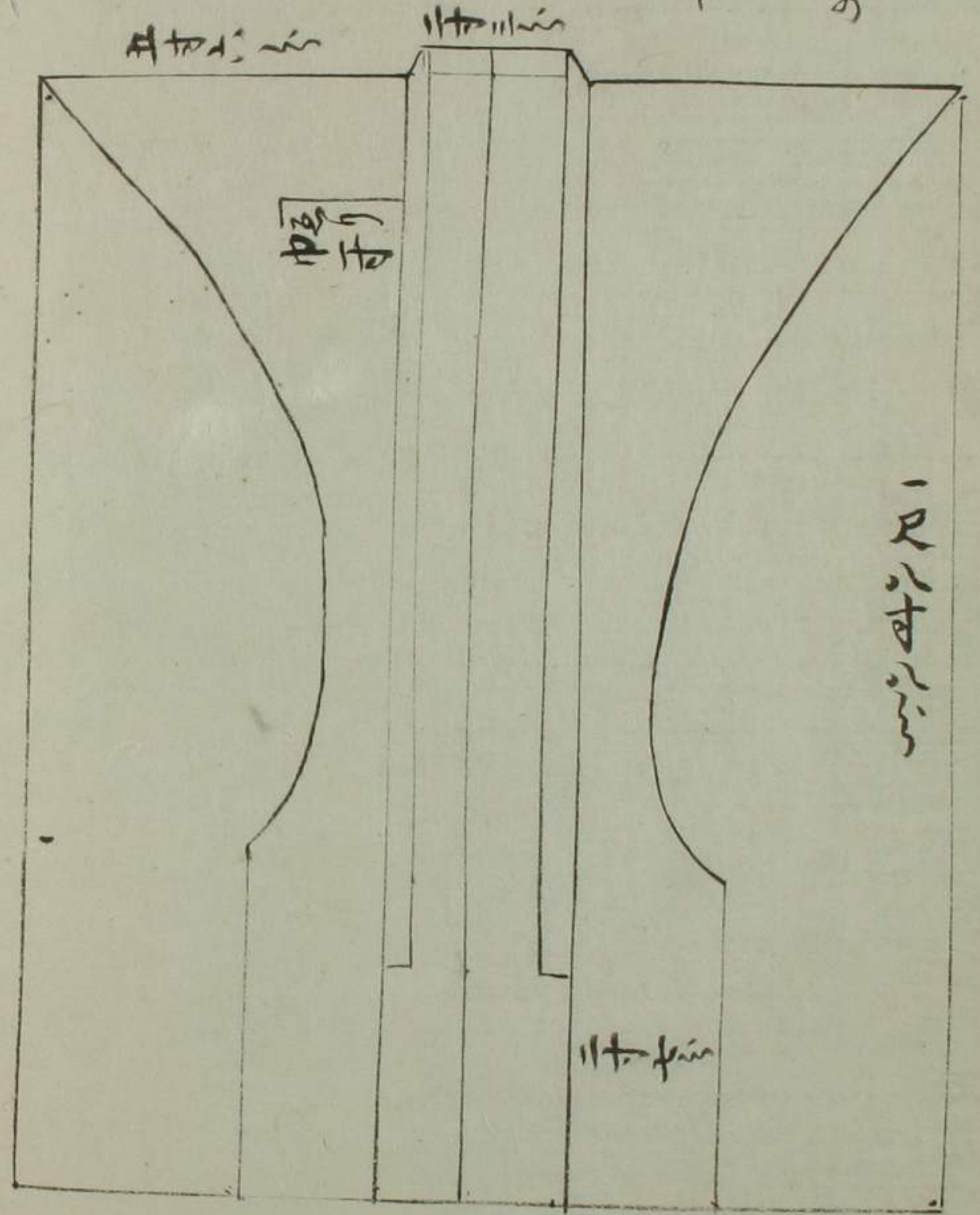
○朝鮮名号

九思長門守ケ為辛アリ太周朝鮮征伐の時九思氏は高麗王
 今之修羅ヤリ予一友人より摺りて之賜りて依りて其字を
 字白ゆあり

九思長門守ケ為辛アリ太周朝鮮征伐の時九思氏は高麗王
 今之修羅ヤリ予一友人より摺りて之賜りて依りて其字を
 字白ゆあり

後子舞へる鳳凰の
模倣なり
長巾か裾を
とて志す

○ 曲皇太周沛肩衣



○ 萬松山曼陀羅開帳狂詩

琴籟閑人裁識

天保七丙申年高繩萬松山無量院泉岳寺於て曼陀羅開帳アリ日本一幅釋迦八相大軸ナリ大般若六百卷并諸經文ノ文字ヲ以テ圖畫セントイフ越州ノ香山彈師筆ト云二月十六日初テ開帳六十日ノ間日延十日都合七十日四月廿六日終ル其形勢目ヲ驚カシテ高繩江都ニ充ニタリ隣山ノ如來寺ニモ境内群集シテ西寺ノ繁榮ニ事實ニ詞筆ニ盡シ難シテ了カ座右ノ人々其山翠山喬松花鏡蝶等ヲ始メ何レモ替ルニ日毎ニ見物セシユ奉納觀物ニ至マテ大方間及ベリ昨日何レ今日是ト替リシ物ノ出ル毎ニ其サマイト委敷物語ナスヲ長日睡魔ノ一防トセリ予ハ一度モ見サレドモ居テカウニシテ見ル如ク二三度見物セシユヨリモ却テ委細ニ覺タリ呵レ依テ謾言ノ狂詩ニ十余ヲ齎メキ出セリ是其十分一ヲ述ルナリ又如來寺開帳ノ由ナレド何レ開帳ナルヤ知ラズ噂ニ聞ハ泉岳寺日延ヲ願ヒシ時開帳ヲ願ヒシト云設モアリ何月延ナルヤ泉岳寺ノ方終リテモ寺中群集ノヨシナリ此事ハ委敷知シ後又別ニ言ニ只西寺ノ繁榮ナル形勢ヲ述ルナリ覽者願ク高作ヲ賜ヒシ

開帳寶軸

曼陀羅大幅ユ堂内ニ掛ルナラス別ニ高五間横三間ホド假堂ヲ修造シ處ニテ開帳ヲナス尤細畫

摩利支天ノ尊像
黄金ニ非ズ画幅ナリ由
主稅所持ナリ觀音
ニ見カ黄金傳ナリ
今日幼ニ箕山ヨリ開
リ場所モ違フ義士
舊塚ノ門外ト云ヘ
予目撃セザル事ナ
カニ誤猶有ヘ熱
ノ人推斷シ玉ヘ
五月七日ニ宵ナリ書改
ン事モナキマコ
頭書ス

箕山ノ話
用自序

埃蝶等三ノ
話

同前

香松ノ話

翠山花鏡等
話

ナリ文字ノ画ナリ誰モ心付カズ織物ト云人モアリ又寺中ニ觀音ヲ摩利支天
ノ添用帳アリ摩利支天ノ黄金ノ由大石主稅カ所持ノ尊像ナリトイフ

皇國無雙尊一軸三間九尺曼陀羅
圖成釋迦八相畫泉岳寺中參者多
義士等所持之靈寶

其品大方審附

鎗劍舊章破鉄衣懸連檀上示餘威
或言遺品又贖物區噂未知何是非

開帳之評

西寺ニ泉岳如來ノ西寺ニ此度ノ開帳ナリ眞
義士ノ開帳ナリ

今般開帳勝從聞西寺靈場人若雲
評謂全非尊軸德應依山裏有義墳
又

參者往來日幾千集群義塚酒家邊
或叱觀物又靈寶堪笑人班寶軸前

受停止類

人毎錢ヲ受テ義士ノ塚ヲ見スル事四十七人夜討
海ニ折捨テ大槌ヲ持テ以中ニ菓子ヲ入テ賣行ク事數

處ニ高繩自邊茶屋酒樓都テ提燈能廉又女子ノ前裾ニ至ルニ淺野
家總五三節引大石ノ紋前ヲ染ナリ眞ニ絶倒ノ至具外停止ラシ類尤多シ
トニカク言ハシ却テ煩ハシ其ニナラ
衆ヲテ證トシ余ハ皆累シタリ

乞錢令見義墳裏或扮忍姿賣菓子
短幘前裾提燭紋忽聞官府皆停止

觀瀾山

泉岳寺中ノ山門ノ外ニアリ高サ十丈余ノ山ナリ以度多ク樹木
ヲ取拂ヒ數十茶店ヲ出セリ眺望殊ニヨシ老樹駢巒多ク此ニ成ル可
惜

萬松山裏右高固此度拂林作覽場
蒼海市街真絶景懸連茶店置新娘

常德睡車等話

酒茶店

是等ノ類ハ二絶ニ尽シ難シ井トモ皆同シサマナリ
タク言フハ却テ煩ハシク真ラ夫ヲ依テ思ハス

酒家茶店數無疆婦發鶯聲各競粧
遠國勒番還俗客頻生已惚日連行

首洗井

以度奉納庭上ナリ井ラカネリ冷水怪石ヲ並ベリカニ舊
跡其ノ有テコソコノ類ハ後ニ井傍ニ二人倍坐シテ加持水ノ

如ク小器ニ井ノ水ヲ取テ養ハテラヒテ
諸人ニ施スト云真ニ絶倒ノ至ナリ

春松花鏡等話

昔時云洗羽林首半隱叢中猶未朽
可惜昂今新掃除舊蹤忽度庭工手

奉納物

番附ニ審カレ

累炭編錢又積搏漆分于拭恰如播
押描彩画提燈類處ニ造成十步園

箕山等四五人話

翠山娛蝶等話

又錢細工之額

堅五尺横七尺余
ト云五月十日箕山ヨリ同タリ

大錢小錢當百錢縱橫連綴任姿編
趣工義士碎門趣彩色架然自画妍

人形輕業

高橋金次郎ガ作テ尺ニ滿ス其搖動セルサマノ如シ
變化自在真ニ賞スベシ是笑布袋ト同小水ナリ

口上如演搖動忙古今早業妙無疆
鬼僧念佛眼前碎忽地變成調布娘

笑布袋

縮細工ニ眠袋トサマ尤妙
人形輕業ト同所番附ニ審ナリ

布袋倚牀卧画壇頻為呼起稍醒眠
二童鉦鼓顛成踊恰若放聲笑鞞然

山雀成藝

詞ニ從ヒ色ニノ藝ヲナス者トテ水ヲ扱又ハ盤中ニ
浴ニ小巾ヲ咏テ去リ體ヲ扱フサマナリ入上覽ト云

娯蝶話

箕山等五人話
同帳第一細子

花鏡話

吾松等五人
話

其山連車
話

蟬蝶
話

更出籠中止井涯隨辭汲水則吞之
入盤洗翅啣巾去閑拭一身妙又奇

大人形

松盛其周平作之韓信天尺外三人何レモ二丈七尺若羅紗ヲ著ス尤妙工之阿金ハ右人形ヨリモ大ニ是ハ人馬共ニ主物ナラズ同人作ニ

顔色肌肢工最奇人形二丈皆如斯

阿金臂力駐荒馬韓信屈身潛股姿

竹鐵細工花鳥

龍五言ト云人作ナリヨシ鶴孔雀牡丹芙蓉杜若石竹竹工之藝ハ較物ノ細工ニ看極木家無來免ニ

竹工兩鶴雙孔雀添得牡丹燕子花

傍見鉄工岩壁上翫來荒鷲枕溪涯

模雷

狸ナリヨシ二月十六日初日ヨリ出ツ觀セ物ノ中ノハシリト云ベシ

更繫双狸稱模雷遠從天竺是傳來

獸中未聽如斯物欺偽婦見日幾回

兩長谷川大仕掛

面寺ニ於テ與行双方トモ無類大仕掛新工万人ヲ驚ス十回余四方小家

教人話

掛双方共ニ番附ニ委シ泉岳寺ノ方ハ信田五市カ細工ナリ看板ノ樓門ノ高欄ニ衣冠ヲ着セシ官人欄ニ倚テ坐セリ傍ニ玉堂アリ少シ間アリ

天女車ニ束テ紫雲ノ中ニ有リ人形四尺余ニ月宮殿ノ体ト云傳サレトモ其人誰ナルヤ猶考フベシ金銀彫鏤ノ結構目ヲ驚セリ妙ハ

如來寺ノ方ハ清セカ新築ニ看板ハ鶴ケ岡ニ氣色ニ傍ニ額ニ堂アリ多ク

看板ヲ額ニ画テ上ニ掛キ其下ニ茶店ヲ出セリ見物ノ人云ニ休ム方ニハ

三ツノ人形アリ五尺余則師直ト顯谷夫婦ニ上ハ社内ノ景ニ具形特方富

五市ト伯仲セリ是ハ九十日ノ回與行ノ由

十間四面小家懸新造雙方長谷川

看板仰山驚萬客金銀彫刻美娟然

長谷川富五市為觀物

赴向ハ朝比奈巡馬ニテ異國ノ景人物ヲ作シ舞臺高改多

變化舞臺知幾回揉消糴出千人廻

回前初其心
連車話

朝夷巡崑異邦景人物山川工妙哉

長谷川清七為觀物

赴向忠臣藏ニテ初段ヨリ一段幾ヤ不舞其主人形共ニ種ニ變化ス

金樓城郭又靈場趣向報離忠臣藏

又馬寸人奇代業須史改變更無疆

童子足力曲持

何七七八ノ輩ニ小童ハ十二ヤ斗番附ニ委ニ

巨石臼瓶或大盤受載兩足周旋安

小童登是頻成曲噫妙看人流冷汗

足藝婦

早咲小梅ト号三十ホド婦人本美不醜而手ヲ出サテ腰ナリト或ハ短肢ト云足藝ハサマ感心不少至細番附ニヤ

懷攸兩手不曾出至妙足藝驚客心

衣服裁縫投扇興胡弓三線又彈琴

為觀物雅吟

此類前ニモアラド悉別テ吟スルニ違アラド板屋ノ物一絶トシ餘ヲ集合シ只其名目ヲ述ル此下皆如此

芝居寫繪視機關絃鼓鑿々々々二山

夜討生蕎麥賞餅擬名賣店遍往還

又

目人相撲目人ト婦人ト相撲ニ大體ノ如ク鳥獸魚虫ノ數甚多ニ何レモ拵物多シ

万作踊歌不耐忙盲人相撲恰如狂

大蟬海獺多其類狐釣狂言猿戲場

又

奉納ノ賣物見セ物ハ前ニモ言ユク故奉ニ違アラド只其十分一ヲ載スハ處ニ怪カト書シ前ニ立重テ事ニアラズ別種ニ或ハ水虎怪犬蛇蓮ト又其物ノ子花用カ其外多ク有

西寺繁華日如斯雀弓名鳥異邦鯉

天川白酒於輕燒栗餅曲春主稅館

吹矢紅顏留俗士狂言鉦鼓集童兒

同前

梅子翠山喬林
花鏡寺話

其餘怪力丸山踊億兆參人難建錐

以外猶洩セシ物多カルベシサレドモ餘リ拙キ物ハ皆省筆セリ予モ目撃セシニ非シ相違ノ趣多クアルベシ熟覽人是ヲ見ハ直ク補助ノ高作ヲ賜ベシ而寺ノ趣中ニ言尽シ難シ言々キ事猶數條アレド拙筆ニ及ハズ大畧ヲ言フニ

賞開帳平反ミカワラス漫言ヲ述ル

大壯大壯噫大壯嗚呼大壯噫大壯
口矣筆矣難言盡高繩開帳噫大壯

開帳後景

一時開帳實如夢寺裏寂寥多人不逢
過日繁榮無影貌只看處有抗踪

斯のめき漫言の哉以て捨きして書集して
主として年序の後の一巻とありありと
繕出度の小窓のりくく午時とありありと
とありぬ免ち四つとありありとあり

時惟天保七年丙申端午功全成

夏之終り



禁市代閑

天保七丙申歲

○一橋珍事

一橋 從士

申三月廿三日揚屋入

中嶋吉太郎

申二拾三歲

其方儀之入二郷筋迄氣分佐致一死致膳所体中益
 食之能出東海道川崎宿中七方より多佐先とも不顧
 酒之始解其心為平肥前宿國言女宿泊相成申七定
 向之肥前宿泊之宿水建有と見請月障とて可れ致と人
 得同役大井原宿申外多人供之取障之能致之砌之村幸五常
 外之人名宿之酒能之上不不用候水之障之候同村本障
 多庫直設可候之深宿申外多人一同能致入途中多庫下
 男之候之脚之仍逢石宿水之肥前宿家申申中申上之云々

予于雜示降旨十文儿之云版以每——九里龜以常信子存之脚
在右之——伸之園札建直以場所近之辨之川連糸龜常
外之入信之古札之理不之——以所——信用以——竹木板控
及亂妨其上存之脚之性名相尋以常後雜之忍入之各名中
信也言刺古以所之園札之信之脚持系應之上載之見
信于言尔之對——然——以重——以板後之信得存古園札之信也
御祚号も恐有——と土豆掛并段不恐
公保法外——以弟不局玉極——身微門中并之者之

申五月十九日

右於平屋鋪内藤集之正家来申後

申後

民部公啟

徒士

平井东吉

同公

九里龜以常

其方有保民部公啟之御前延章并信以每——以我履所
体中昼食之——以中在法通以山寺宿中七方之立号信先之也
不顧酒之信碎其以信初平肥局信物也言——以常信以相成事
七定而——肥前信泊之園札建有——之良信目障——之可相
成也之心得同信士中信吉古言尔之入信——以信之信也
之村幸也言——以信之入之信也——之信也——以信也
札通入同宿本降下男九之信札之信之信也——以信也——以信也
不致連同人之及打擲園札用以——以信也——以信也——以信也
園札取除——以信也——以信也——以信也——以信也——以信也

其方後民部以殿六郷筋延之氣、以帛信先、おわて碎例、
社道内以多、其止同役中山智吉帛外之、在事法通
川崎宿、建有、松平肥前守泊、関札と括云、其後又郷
及来る、其儘、以多、道道、居形、おわて、乳、信、以、帛
相違、中、之、始、末、不、好、身、押、込、中、行、也

佐士
金子新之助

民部郷敷

十八月分
當麻平之屋名代

月田 信之助

當麻平之屋、民部以殿六郷筋、之、信、新、之、助、武、川、澤、田、村
久之、帛、方、中、休、所、水、女、同、所、出、役、以、多、居、女、信、佐
之、者、其、在、海、邊、以、寄、宿、地、内、お、わ、て、松、平、肥、前、守、泊、之、関、札

括取方古窓平陣之庫住進以多、其、子、細、来、乳、子、連、之、職
之、中、之、如、元、之、通、可、建、道、各、一、已、及、了、各、名、先、拉、之、徒、士、之、村
幸、五、帛、外、方、水、尋、以、知、関、札、之、際、之、候、宿、役、之、中、役
ル、多、れ、と、も、難、云、陣、各、中、之、身、其、信、以、多、道、由、中、之、
兵、庫、中、之、以、知、之、難、詰、以、多、入、上、之、猶、又、得、と、始、末、之、探
之、中、外、方、之、以、遠、之、候、也、有、と、ま、ら、ず、お、近、之、始、末、不、好、身、
多、度、以、り、留、置

民部郷敷

徒士月謝每方見廻

日中然八

町平服前守家系

日中帖、遺名代、家系

東海通川寺宿

年冬口及森門
小山平^五大橋門
羽室平大橋門
平岸 寺庫

同入下馬
仁之助
九之傳

問屋
平十吊

老屋
平十吊
平十吊

名主
三平傳
外三平傳

年冬
平十吊
平十吊
平十吊

百性代
平十吊

定代
平十吊

百性
平十吊

源右平

平十吊不坊心曲も平十吊平十吊
右於日及平人正定初唐沈以因中平十吊又平十吊平十吊平十吊
平十吊

れはるの藤をよきしりし由情更然のまじりしりし由
て今とてして仰天しりしりし由情更然のまじりしりし由
もつしりしりし由情更然のまじりしりし由
言利の罰なり

本多氏
より

杉田依きいしりし由情更然のまじりしりし由

伊勢尾加多信いしりし由情更然のまじりしりし由

南崖子
伊勢尾加多信いしりし由情更然のまじりしりし由

○毛の降し尊

天保七年丙申三月十九日の夜
江戸中ノ毛の
降し事 影し 夕の白毛の
又の班毛の長き尺余短き四五寸なり予は右
の毛の信て圓中と見えし白毛數十根拾ひし

昔とて先年天水中 廣石山焼の節も毛の
降し事 影し 夕の白毛の
是の山嶽の焼亡しりし由情更然のまじりしりし由
天変ありとすりし由情更然のまじりしりし由
く影更降し事 影し 夕の白毛の
ある一説あり本所迄の篠師梅上り白熊
毛の毛と梅と一面の道へ川を入りし由情更然のまじりしりし由
は暑川吹来りし由情更然のまじりしりし由
まじりし由情更然のまじりしりし由
葉根地をとりし由情更然のまじりしりし由
一葉とありし由情更然のまじりしりし由

あはれ 信実 説と云い 追得と云い

○近衛中吉宗評判繪景

三保書申七月乃りしめ 吉宗評判の古画と云い 金宗

Handwritten notes on a slip of paper, including the characters '金宗' (Kinamoto) and '三保' (Mitsumoto).

吉宗評判

Vertical columns of handwritten Japanese text, likely a transcription or commentary related to the scene below.



ハ部
ホ入
ウ部

○札差行

君不聞昔時藏宿草葺店今住土蔵是高樓主
人不識勘定事二十五一積成丘本所隱宅盡手造揚
疊忽替能舞皇錦繡裝束驚人眼金銀道具夜
光益鷹野猿樂貴人體賭碁茶湯又俳諧二朝呼出
遂吟味身代破滅懸手枷從是世間何者悅欲踏大借
札旦那

ハ部
ホ入
ウ部

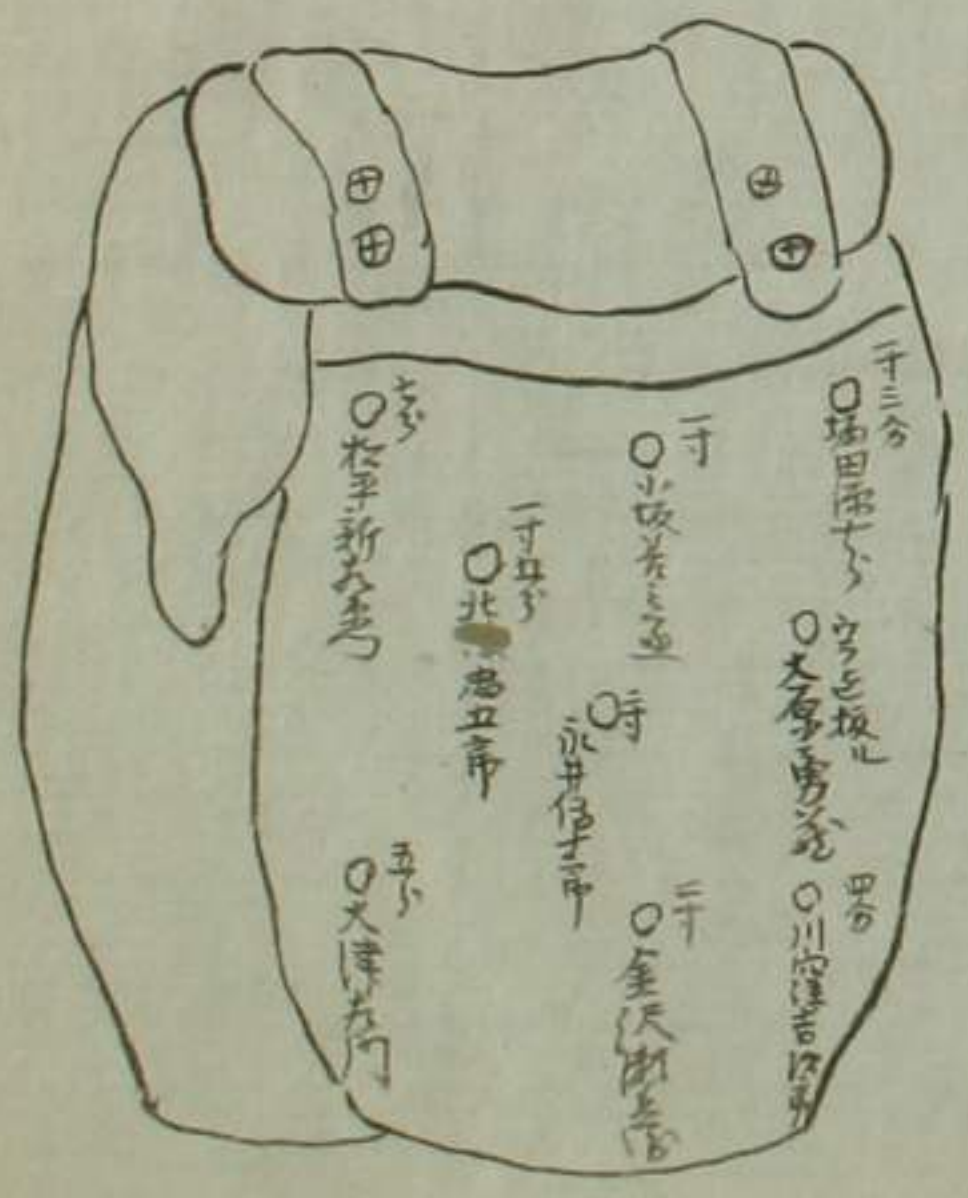
高也仲乃大子軒
ハ部
ホ入
ウ部

○望拍試

文政十丁亥年九月廿二日頭西向望拍

新田姓
○大津 大門
○倉橋 世四郎
○津金 新十郎
○川宮 彦次郎
○伊勢 平八郎
○永井 信十郎
○山崎 岩太郎
○新倉 隼人

新田姓
○津金 新十郎
○伊勢 平八郎
○永井 信十郎
○山崎 岩太郎
○新倉 隼人



新田新田...
外人...
...

釋奠詩卷

昌平神庫藏永正庚午釋奠詩一卷皆當時提關公卿真跡
糊貼作橫卷真希世物也舊加州相公所藏元祿初廟聖廟
新造因以進獻云應仁之後京師大亂無不日尋干戈皇統
式之或微未有甚於此時而諸公於亂離之際猶且仰止聖德
如此王化未竭釀成異日昇平蓋非偶然也謹採錄於此其詩
巧拙所不必論也

賦杏壇迎春詩 題中取韻

關白九大臣尚經

綠服昨階紅殿日新正殿一枝春本朝傳得徵君德自是儒林同鬼神

同

大政大臣實淳

東風二月杏壇新四海弟兄周室春對花看他世上凡紅俗紫滿庭塵

同

從一位冬良

杏壇迎得上丁辰斯日登臨禮奠新萬古文章猶郁久尼山花月一幅春

同

權中納言元長

暖霞一片杏壇新朵朵紅花吹露勻今夕側懷享禮宴仁且筆筆春

同

權中納言宣秀

月前雨後杏花辰壇上晚雨霞紅氣新美艷為人如勸醉歌臺面亦陽春

同

權中納言兼大藏卿菅原和長

杏壇上杏花新紅為狀元吹不塵營亦似題黃甲字花中百轉魯詩春

同

參議菅原章長

吹面東風春未滿紅情既入杏雲壇新亭莫待探花真今日官得意鞍門

同

參議古中將公休

杏紅漸動十欄干忽覺香風入魯壇雅燕雅賞似和曲看遍備坐大絃彈

滿

同

壇上杏花吹不盡日邊紅入晚霞白眉情孔思滿堂閣時裏換回千古春

同

女納言清奈宣賢

韶光遍滿紅衢晨燕柳鶯花雨霽新茗被詩豪奪凡景春倚年賞空壇春

同

并從四下行掃部頭兼大内記造酒正卿教中京朝臣師家

今日在壇詩思新庚戌二月報芳辰太平有瑞文如此花咲鳥啼周室春

永正七年二月一日上丁會

同職師尊訓浚

林信彭拜上

瞻仰宗仰萬世尊經傳教浚滿乾坤及冠清肅修禮祀神與斯文今古存

同

人員稱拜上

殿上瓦院色清祭裡今日照文明吾曹共是露恩澤教化千穰學方平

同

紫邦大拜上

憲章武述虞唐一部魯論拱百王欲識明詩聲教浚春社匪懈奉馨香

同

平井業拜上

幾年丁日依明祀曾是成文德崇沐水餘流到雲遍蒼生誰不沐茲中

同

訓浚萬方同浚治師尊盛曲極崇尊正逢建子周正月補祭秋丁祀事隆

同

末包曼壽拜上

遺經亦載道斯存訓浚鄙都師愈尊佑他風移清世日知教聖澤布元之

同

澤津友敷拜上

一從先聖設扶桑二仲兩丁嚴祭極今古洋、謨與訓些、奉火亦何妨

同

山田之憲拜上

傳訓浚徒未德業尊壯載門徒似雲屯移凡易俗辭經術故明禮雅

同

此并至德拜上

盛哉聖德日明章一遺訓無窮被^方世共浴恩波千載下九或樂備正輝：

同

佐藤垣并上

道脉德華耀古今乾旋坤轉素王心比擬聖謨無^盡盡一利春而^綠綠

同賦重及厚凡

平井業并上

濠^凡居俗月相遷能任挽回^相賴賢五典更張維世綱九^快重述^右文年

同

田中喜道并上

世^濠凡時入秋更知嘉穀報天休舊邦仍仰神明德聖^氣氣洋洋自^不不窮

同

結城^日非濟并上

古往今來等列聖天開地闢惟先師^厚厚凡重作唐古^復復文德監^之之冕^時時

同

柳井篤并上

斯文常在世第^用用清地維新道自隆周礼^今今觀^沙沙宮^事事^義義^知知^民民^德德^及及^厚厚^凡凡

同

梶川正數并上

大哉高殿望何窮祭祀時行礼盡通聖德無疆蒙^北北土萬民今日^及及^厚厚^凡凡

同

山上^之之保并上

重及^厚厚凡萬歲^於於孔林雲靜^當當聲^出出聖明^從從^據據^周周時^舊舊^聲聲^教教^長長^傳傳^之之^州州

同

内田義^美美并上

不^教教^遠遠^近近^咏咏^康康^哉哉^多多^子子^滿滿^廷廷^皆皆^俊俊^才才^德德^化化^從從^單單^于于^四四^表表^黎黎^民民^於於^夏夏^時時^靡靡^未未

同賦博教深求

箕作春^義義并上

明^至至^道道^學學^方方^開開^天天^下下^生生^徒徒^仰仰^道道^未未^應應^是是^身身^平平^三三^代代^治治^深深^求求^博博^教教^推推^英英^才才

同

廣田憲^令令并上

時^泰泰^文文^明明^曾曾^境境^開開^設設^序序^奉奉^祀祀^魚魚^禱禱^雷雷^郁郁^教教^決決^求求^多多^士士^淑淑^美美^布布^時時^作作^大大^哉哉

同

廣瀨政^典典并上

信^美美^宣宣^唯唯^西西^漢漢^同同^教教^或或^從從^者者^商商^周周^隆隆^春春^秋秋^尚尚^古古^嚴嚴^明明^祀祀^濟濟^之之^廟廟^享享^未未^空空

○古印章

上宮氏徳五 明代之印



上和靖信永商
林和靖之印



五岳
真形
之圖



小五行長之印



碑文名

一 妙光寺吉祥院法華寺

二 田

三 廣布寺大衆寺

四 田

五 鷲峯寺法華院中道寺

六 千手ヶ谷

七 高麗寺五輪院寂光寺

八 麻布

九 三谷寺海智院正長寺

改号

一 王 經通寺文殊院園南寺

二 法華院号不詳

三 三等寺妙蓮院永隆寺

四 改号 院号不明

五 鷲峯寺法華院寶相寺

六 改号

七 大船寺善思院境州寺

八 改号

九 道徳寺教解院勅寺

房州七條郡成川村

曹定嘉院所繪之圖

以手

圓蹄山佛心院方廣寺

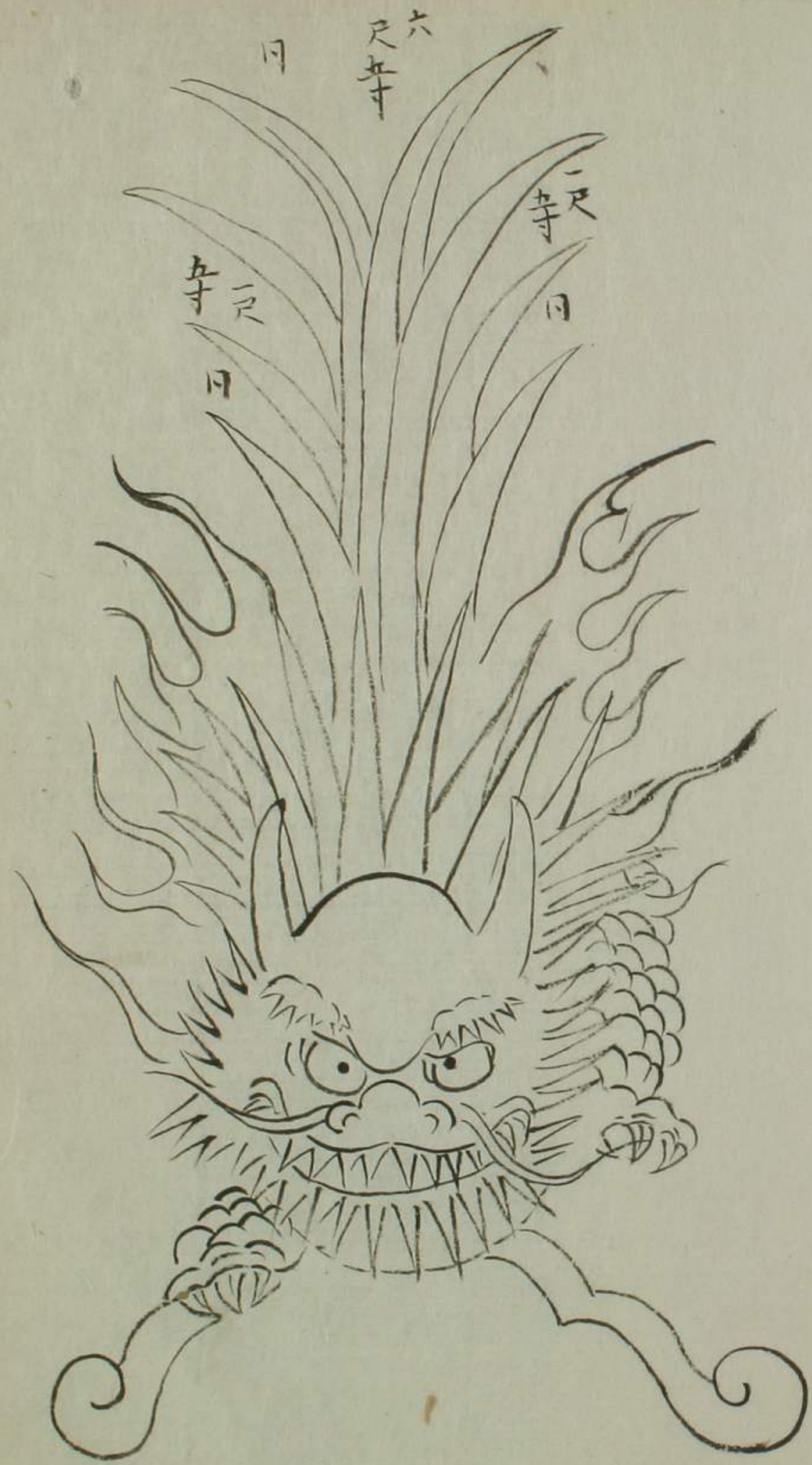
天保甲午二月月 堀坂力智齋所繪之圖

見之

○ 聖堂鬼狀頭鬼龍子之圖

天保而申冬十月古古 友人古山雪齋 持本之圖
見之 必果尔 是之 寫之 也





神田鑄物師奉之
 淡谷在
 富空地
 地ニ鑄タリ



鬼籠子

四方ノ下リ棟ノ止リニアリ

鬼犬頭ハ棟本ヨリ幅二寸五分厚サシノギニテ五分宛
一ヶ所ニ本宛木ヲ建其上ニ置シフクミ木ノ如シ
鍔目不同九貫六百目ヨリ十二貫目余ニ及フモアリ

鬼状頭

左右ノ棟ニ上ル右ノ足ハ前左ノ

足ハ後ニアリ

是ヲ烏威ニト云フ金箔ヲ漆
ヲキニス



堂内敷瓦ノ所ビントウト云石ヲ瓦ノ如ク角ニシテ
敷クビントウハ伊豆國ヨリ出ツ石ノ色白シ上ヲマハセ
ウルシニテ塗ル
鬼状頭棟へ上ケヤウニフントハ異ノ外ヲムク

寛政十一己未年 聖堂御普請出来

御年傳

本多伯耆守

堀 又七郎

松平近江守

堀 左京亮

小出信濃守

於柳間松平伊豆守申渡不

黒田甲斐守

松平駿河守

稻垣信濃守

秋月山城守

本多伊豫守

鍋嶋和泉守

左色二年以奉書申遣不

御用掛

御光中 松平伊豆守

若年寄 堀田横津守

市助守奉行 石川左近將監

御作奉行 神保佐渡守

御目附 小長谷能登守

出來榮見分

御勘定奉行 菅治下野守

御目附

蜂屋源八郎

古之外御用掛姓名田谷之

○催馬樂

於抄中催馬樂部第三十二

律歌 震筆本我之己
下四首無駒

高砂

夏引

貫河 藤原
無之

走井

飛鳥井

青柳

東屋 同

庭生

我門

我門 乎

伊勢海

大芥

淺水橋

刺櫛

大踏 或大道
藤原無

逢路

道

更衣

鷹子

老鼠

或號西寺
源家無之

我駒

澤田河 狹路

鷄鳴

陰名

呂歌

安^ア名^ナ尊^タ尊^タ
 葦^ア垣^キ
 葛^カ城^ラ
 此^コ殿^ノ之^ト
 美^ミ作^サ
 青^ア之^ノ馬^ウ
 角^カ總^ク
 酒^サ飲^ウ
 奧^オ山^ク

新^ア年^ラ
 山^{ヤマ}城^{シロ}
 竹^{タケ}河^{カハ}
 此^コ殿^ノ之^ト
 藤^フ生^シ野^ノ
 妹^{イモ}之^ノ門^{カド}
 本^{モト}滋^シ
 田^タ中^{ナカ}井^イ戸^ト
 奧^オ山^ク

梅^{ウメ}之^ノ枝^エ
 真^{マコト}金^{カネ}吹^{フキ}
 河^{カハ}口^{クチ}
 鷹^{トビ}山^{ヤマ}
 妹^{イモ}與^ヨ我^{ワレ}
 席^{セキ}田^タ
 蓑^{ササ}山^{ヤマ}
 無^{ナシ}力^{チカラ}
 鈴^{スズ}香^カ河^{カハ}
 蝦^{エビ}

櫻^{サクラ}人^{ヒト}
 紀^キ伊^イ州^{シュ}
 此^コ殿^ノ之^ト
 石^{イシ}河^{カハ}
 大^{オホ}宮^{ミヤ}
 眉^{メイ}戶^ト自^{ヨリ}女^メ
 難^{ナシ}波^{ナミ}海^{ウミ}
 我^{ワレ}家^カ

○ 麒麟之圖

一 乾隆四年三月午產麒麟於江南省鳳陽府靈璧縣民間

王煥文者家因民間不敢隱藏即速呈報

官府

上北京 御覽將此麒麟進

上

帝都之後即放之內苑此事怡因傳聞特於官府衙門
 內設計負求圖樣即託畫師程致遠臨而帶來但此
 麒麟乃王煥文所蓄之牛与龍交而所產因今
 乾隆帝極是聖明之君萬民稱為小竟舜故天產此靈
 獸以顯其瑞耳

元文四年六月

日未第亦番廣東船主龍格中具



雷州縮圖□□

清乾隆四年此方元文四年麒麟出三
 乾隆四年二月一日午時鳳陽府靈璧縣天產麒麟
 麕身牛尾馬蹄五彩腹下黃一角角端有肉鬣宰
 即繪圖申報進
 東吳程致遠臨□□
 南鮑秀吉

御覽

麟

宋荔裳現觀察詎其鄉趙鵬程者官彰德太守府庫中有一麟相傳明武宗時土人所獲誤斃之獻於官野庫中趙任滿欲取之吏不可乃斷其一脰攜歸毛作黃色紋理如刻畫蹄通明類黃玉宋常見之

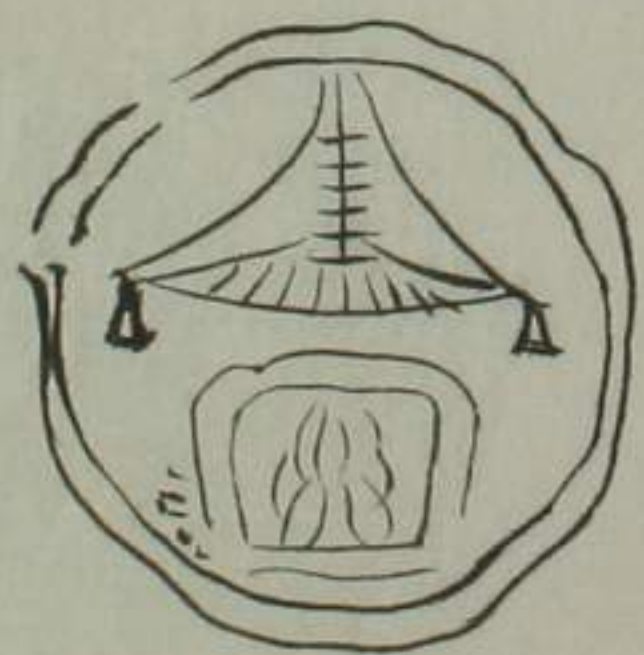
池北偶談 談異

產麒麟

蕪湖張姓者賣腐為業其妻孕四月生一麒麟圓手方足背青腹黃通身翠毛如繡左右臂有鱗甲金光閃閃墮地能走饑飯能食好事者以為祥瑞方欲報官而是晚死矣距生時只七日

新齊諧記

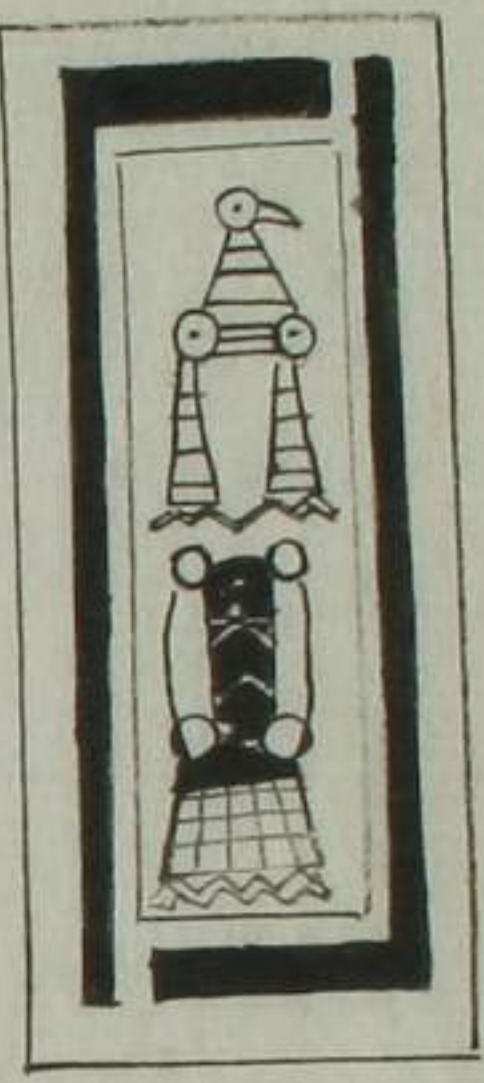
○ 古尾四品



河內古市郡十六心
令剛輪寺什物之內

○ 骨牌

一安永庚子封内房州へ南京ノ漂船アリ難商玩ヒシ
 覺牌トテ加々見氏三四枚貫ヒ得タリ尤ノコトシ



図ノ桂林漫遊ニワケの如クありたり抄

寛政庚子歲安房國立澤へ南京高船漂着ス云
 舟中ノ誤リ之ノ由アリ此ノ後小屋ヲ取拂ヒタル路ニ
 テ拾ヒタリ中骨牌一枚ヲ弔ニ與フ其形圖ノ如シ
 傍ニ意書ト書タルハ浪子燕青ノコトナリ可シ



桂林漫遊
 ヲリウラス



右ノニツハ庚子年一邊見利八千倉浦ニ難高世具
 得タルモノトテ龍ニシラス牌牌ナリ

魯西亞國情事を中々もて流るるなり形を裁くをんめりよむと
 カルタト云れ打三ツナ板あり男女の形と画くをカルタケケライト
 之ハ如くして流るるといふやかりりゆは有カルタを屏帳の所南ヤ
 メリカをボトカリノ改をえんたり是公令く我がよるあはれし
 性質云ボトガリもボルテカリ波ノ杜底ル我邦ニアル下カル又強く南
 かり即耶蘇教法を弘めありしものナリ下カルタと云辞ハ
 也して牌又圖版のより改選巴河中返利の辞しをん
 法古情蔵のニツハ環海異聞
 吾意ナリト云

○唐土 歴代帝都

歴代帝王の都せし地を考るに伏す教は漢に於て

建陳の陳州府あり神農の都ハ伏す教と云々 或ハ曲阜

子都と云々も云々 曲阜ハ今山東兗州府あり

少昊の都ハ曲阜上ハ顓頊の都ハ帝丘今山東曹州府あり

濮州今山東濮陽府あり帝嚳の都ハ亳今河南開封府あり唐堯の都ハ

平陽今山西平陽府あり虞舜の都ハ蒲阪今山西蒲州府あり夏の都

ハ安邑今山西平陽府あり高の都ハ亳上ハ周の都ハ豊鎬今山西

安府今山西安陽府あり東周の都ハ洛邑今河南洛陽府あり秦の都ハ咸陽今陝西

西漢の都ハ洛陽今河南洛陽府あり後漢の都ハ長安今陝西

河東府あり長安今陝西東漢の都ハ再洛陽今河南三國の魏の

都ハ鄴今河北彰徳府あり吳の都ハ建業今江蘇

湖北の武昌府蜀の都ハ成都即四川西晋の都ハ洛陽

上ハ東晋ハ建業を都とす建業既ニ宋齊梁陳の都

ハ俱ニ建業を都とす隋の都ハ長安建後ニ洛陽移リ

長安今陝西唐も都を長安建宋都を汴建業今河南

河東府あり長安今陝西遼金元明の都ハ均今北京順天

府遼ハ浙陽府今山東金元大興府今北京明の都ハ

之清朝も都を順天府今北京今の京師ハ明代の北

京今北京此地宛平大興の二縣ニ跨リ北極星今北京

四方より三十九度百八十分たる滄海を環へたる
大川を擁へ其居庸の固圜は枕り南の河海の
流を襟とて形得る下より甲より城す天府
固より南を望むあり

○芝海龍燈と傳

天保七年一而申張嶽の秘迦も固橋回向院とて六月廿
二日燈六十日祭日延才に終る芝幸田某院とて又宗地ありし
其常備海より一夜に終りて云々鳴也云々一予は其の
父とて其言候と云々と其異説區々として其言を
得ぬ一或云海と三里程隔て紅光點とて夜より其如異状

ある某院の上より其言候とて其言と其大々天廻り某言
又ハ其燈二つを時刻と不定と云々云々一予は其言を
一予は小史の中にも見ざるあり何とて曉天のよ
き宮下より予は伯母を横より夜に見ざる早大はそ
海より其言候とて其言と云々云々一予は其言を
こととて其大固小異信とて其言と云々云々一予は其言を
めまの言とて其言と云々云々一予は其言を
同年十有五年友人兼笠翁予と訪来て其言を
お其言の事と云ひて其言と云々云々一予は其言を
燈とて其言と云ひて其言と云々云々一予は其言を
燈とて其言と云ひて其言と云々云々一予は其言を

世の物心は都々多々の事ハ何事も海邊ニ極るや宇
治の管人ニ管ふ事と云ふハ怪事ぞ少の敷也或ハ某の
漢邊の折る事ハ折れ上り折中時自來して足歩ハ必中
解飛してあるものや〜 け虫蚊ノ似て飛ぶ事ハ自來
る事ニハけ虫の如しハ類あること〜 重天ノ虫ありと云
々〜 言中ニ生る虫數多き事ハ其類ニハ事々ありて
一〜 事々其目録ニ書るハ強々け海と述ぶる事
あると云ふ事

又一友人某翁ハ陽接節詠多時右の折折詠ヲ撰
寫翁ハ海と云ふ事ハ友人の事〜 我先年赤坂邊ニ住
居ハハ海邊と云ふ事ハ其類ニハ事々ありて百餘
ノ百餘ノ事ありて海邊と云ふ事ハ其類ニハ事々あり
或夜ノ事

あり〜 別草の小字と印心々々〜 海と云ふ事
多〜 挑灯の如き事あり不廻る事あり〜 程々折
り〜 彼先年下り〜 物々〜 少〜 百餘
と見〜 伊地〜 又〜 海〜 や〜 入〜 事
事〜 好む人ノ事〜 心々〜 花〜 四五年
事〜 由〜 事々〜 海と云ふ
事〜 事々〜 事々〜 事々〜 事々〜 事々〜
あ〜 事々〜 事々〜

○擬融謡曲

天保八丁四年三月廿日借馬

天保七年春ハ翌八年〜 世々未穀事也人氏ハ窮乏
或人裁事ハ編述也〜 謡曲あり〜 友人南崖事ハ其事ハ寫事

ワキ上三

美^{ワキ上三}より^三枕^三まもの^三母^三んを^三め^三あ^三て^三り^三橋^三の^三

た^三も^三少^三ふ^三和^三流^三あ^三も^三も^三を^三の^三め^三れ^三や^三
人^三待^三鳥^三の^三こ^三ら^三さ^三ら^三れ^三く^三忘^三れ^三る^三年^三成^三流^三一^三物^三
と^三又^三に^三一^三つ^三り^三か^三つ^三ま^三ん^三水^三流^三流^三ふ^三れ^三全^三の^三
因^三今^三年^三の^三流^三の^三名^三成^三香^三ち^三か^三ら^三ら^三る^三流^三一^三日^三
も^三一^三つ^三り^三申^三さ^三る^三流^三を^三名^三成^三を^三び^三ら^三か^三ら^三る^三流^三一^三日^三
そ^三の^三物^三の^三名^三成^三は^三も^三也^三我^三流^三を^三あ^三ふ^三名^三成^三り^三也^三
あ^三の^三名^三成^三の^三流^三の^三年^三成^三す^三の^三り^三ふ^三名^三成^三の^三流^三

とよめ時

成^三あ^三る^三魚^三ひ^三ん^三の^三人^三の^三名^三成^三の^三流^三を^三名^三成^三
申^三れ^三新^三を^三も^三と^三い^三も^三つ^三ふ^三あ^三終^三と^三徳^三利^三成^三
め^三く^三そ^三の^三流^三の^三流^三に^三さ^三ら^三も^三ね^三さ^三し^三も^三名^三成^三り^三也^三
あ^三終^三と^三徳^三利^三成^三を^三も^三と^三い^三も^三つ^三ふ^三あ^三終^三と^三徳^三利^三成^三
名^三成^三の^三流^三魚^三の^三流^三の^三流^三に^三さ^三ら^三も^三ね^三さ^三し^三も^三名^三成^三
父^三へ^三お^三い^三ふ^三か^三は^三名^三成^三の^三流^三成^三や^三り^三も^三
名^三成^三の^三流^三中^三お^三い^三ふ^三初^三相^三の^三我^三の^三流^三を^三
者^三も^三申^三さ^三る^三か^三は^三名^三成^三の^三流^三を^三名^三成^三

上三三 天ハ雨日秋のあまき 遊事ハ
下三三 長らぬ小かきききき 能くまらぬ世
下三三 酒の肴をかき理也地 今朝の酒の初め
下三三 かしこ目さし馬鹿むき身上地 九魚也
上三三 上三三 腕の力を頼りたてたり上地 又
井のたき者ハヤまききききと 穀上地ひ下地らんらの
火くんハ上地灰のかきにてあきき上地 竹上地は是を
せき上地 之上地井ハ上地香をせき上地 子上地め上地ハ上地志上地ん上地の上地も

て下三三 射下三三し下三三 丸下三三れ下三三ハ下三三 あん下三三ら下三三ま下三三の下三三よ下三三お下三三け下三三ハ下三三 味下三三も下三三お
さ下三三す下三三あ下三三ま下三三の下三三解下三三の下三三ヤ下三三鳥下三三も下三三鳴下三三ハ下三三 鐘下三三も下三三さ下三三え下三三て下三三 我
も下三三さ下三三ら下三三ヤ下三三 散下三三か下三三き下三三向下三三て下三三か下三三き下三三灰下三三の下三三も下三三い下三三き下三三や下三三あ下三三き
と下三三あ下三三る下三三い下三三友下三三と下三三は下三三な下三三ら下三三し下三三 匠下三三の下三三有下三三ら下三三ん
か下三三ハ下三三ま下三三ら下三三娘下三三つ下三三よ下三三ま下三三の下三三荒下三三ら下三三し下三三あ下三三ハ下三三地下三三志下三三も
や下三三い下三三ら下三三し下三三あ下三三ハ下三三の下三三志下三三も下三三

盤渉早舞

大矢ヲイルイルル、丸々火リ。ヲ大矢リ 鐘ト火
ヲ大急ニ方々ニ火

ひききそ後
三月まで兼務
まひの約とす
まひの約とす
いひおの字のり
一果

切しおゆりハ能て進退先度の義之と云
ハ論ちしこれハ用子能あふと云ふハモ
う又志まひと云ふハ同しまひの約
別子舞の舞も能あひのまひと云ふ
あつて一義なる處くハおのの所職を始
故職の事ハ別しハ必二負原をハ理ハ當
擬して別故能とすハ原キ能也者罷して

但し此巻目の中所未有者見ハ得古言
何れハ
十月廿一日此所ハ解

○後土御門院自詠短冊

自詠短冊 題者 一條禪嗣兼良 丙申

後土御門院自當内侍 志ういぬ

祝言
新りし後ハくハ
中しハりハくハ

文明十二年一月廿

裏書

切らぬゆへに能く進退先達の義とて後世に傳へし
 論を以てこれに用ひ能く其の云々のまじりも助語にて志の所と志
 うよ又志まじりゆへに用ひし其の約なりこれらよりして思ひの得る
 別る舞の舞も能く其の以のまじり同義なりて此等の見習ひゆへに舞
 あらう一云なるを極くいわざるの所職事始てその後子加るあり其則故
 故職の事と別るゆへに其の必負屋を以て其の當然の所居なり故に彼負能
 擬して別故能く其の極き能く其有る一して別る舞と能く其の致するあり

但し此名月の中所未有習見の將古言する事疑ひたる所厚々
 可れりしこ
 十月廿一日此所々々解くことえなる

○後土御門院自詠短冊 五人が踊りて

自詠短冊 題者 一條禪園兼良 丙 申



新のしゆへにゆくゆくはなれし
 子しかりてくるるのの

文明十二年一月廿六日

其の齋初筆

其の齋初筆

○流弊篇

天保丙申年流弊の相成と友人の賜書より
三

音羽屋、猫天下、出石、騷動、轉千辛、孝女、手柄、討親敵、
真方、横死、尋家臣、辱士、被殺、茶漬店、救娘、逢害、武士、仁、
水道、大鱧、變金子、猩猩、小僧、乱人、倫、大工、手練、害、勇士、
吉原、仮宅、多浪人、地震、風邪、賑、藥店、百文、流行、如鬼神、

又 什詩七字脫文遺恨

仙石濱田、落著終、浪人、过切、為、貧窮、一橋、徒士、踏、閨、札、
鍋島、家來、○○○○○能、役者、災難、富、本、揃、連、中、
當年、追、剥、仕、合、好、八、善、金、波、入、宰、同、

野馬臺之詩

禮祭公、目、至、運、寸、二、尺、一、
高、年、當、盲、來、開、士、僕、泥、根、
松、討、評、番、原、成、捕、盜、金、男、
引、敵、判、一、播、者、風、流、言、珍、
方、真、崎、長、磨、從、橫、跡、葉、云、
切、夜、行、度、此、仮、宅、門、落、近、
害、五、分、諸、國、穀、之、目、應、感、
人、走、一、吐、滿、男、女、題、千、建、
吉、兵、毒、主、出、若、老、突、本、再、
早、死、藥、城、石、師、兄、弟、猩、彈、
替、驚、画、三、千、漁、婦、如、猩、絃、
諸、眼、師、女、質、置、人、足、以、三、

王南春日
友人贈
ラシクリ

奉侍安置天皇應制

武藏守高物直

生年二八倍濃娘。若返當春三五粧。鄧氏壹銖期
月數。准南洋提待宵光。菅公縁日須梳髮。史進渾
名好入湯。即功眼前如傘灸。天晴引下御良方

○來舶紅毛美人之圖

天保丙申十一月一友紅毛美人之圖。本多氏守崎陽
在船中の時、紅毛守に於て目撃し、しうとて其を美人と上陸し禁じ由
御府より予に板之贈る。表を衣纏せ、由我邦の粧にして見ゆべし
之とて惜しむ眼も晴し紅毛あり是蘭人の護るべしと云ふ予賜は道
圖を弄弄せし友人の湯望を任せありしう、後よりて遺憾限りありし
之を是を得り信てたし法をぬ

原會... 天保丙申十一月... 友人紅毛美人之圖... 本多氏守崎陽... 在船中の時... 紅毛守に於て目撃し... しうとて其を美人と上陸し禁じ由... 御府より予に板之贈る... 表を衣纏せ、由我邦の粧にして見ゆべし... 之とて惜しむ眼も晴し紅毛あり是蘭人の護るべしと云ふ予賜は道... 圖を弄弄せし友人の湯望を任せありしう、後よりて遺憾限りありし... 之を是を得り信てたし法をぬ



原版崎陽文錦堂
史政庚寅孟春
后原



王南春日
五人ヲ贈
ラレタリ

奉侍安置天皇應制

武藏守高物直

生年二八信濃娘。若返當春三五粧。鄭氏壹銖期
月數。准南洋旋待宵光。菅公緣日須梳髮。史進渾
名好入湯。即功眼前如傘笈。天晴引下御良方

○來舶紅毛美人之圖

天保丙申十一月一友翁より贈るる此圖ハ本多氏守崎陽
至勅中の御寄書に於て目撃ししものと云ふ事ハ婦人故上陸ハ禁じし由

文政己丑七月和蘭高船載一婦人未即彼画工埒菲
別奴富之妻之名少々歳十有九隆鼻深目肌膚透
莹最巧女技傍善書画風俗雖異容儀頗有可觀者
聞曾後二閱月其夫祿役平
日本然而情儘々不忍相離故不屑艱難相從到崎
港殊域之人異教之徒其想夫之情猜一不移者可
不謂負乎仍今茲記其概略并圖其髣髴以似
好事人



原敬崎陽文錦堂
史政庚寅孟春



○困世尚能蕃絶

丁酉五ノ或ノ人ノ病ノ神ノ

喰のそ〜〜 菘 津け菜ノ子ノ 三番豊

りふ菘〜〜 千歳 諸色ノ 高砂

或も自の御用あり華年 義理代ハ 杜ノ

ふの〜〜 阿漚 二合が長〜〜 乱

裏店いあ〜〜 為瓶 山〜〜 小盗人

京で云々林ハ 福の神

○救荒二種説

二種ハ三収蕎麥と再發蕎麥と

その三収蕎麥^{サントソバ}はゆ〜蚕熟蕎麥^{ヤツリバ}とりのその状^ヤ稍大なりと覺ゆその
めて常の蕎麥より異なり事あり只早く熟して一年に三収すべしとの
故よふきを種地も種も頃も常の蕎麥より異なり事あり大切に十
八夜ころの霜の後と朔とす東國北地ハ春寒退き難きを以て
ふきを種地の朔も差遅ゆ〜とす〜霜を見らるを以てその
候とす事にて霜よあ〜に忽に枯る故より故よれを種の後不幸
にして宵の室にあり葉筵等を以て霜おのひをさ〜差力乃至
〜枯る〜にその苗を鋤り耕〜以て糞培となす〜か〜寒
暖の地よ〜成熟の速速ある〜大抵五十日許〜熟す
〜その種を〜播ゆ〜亦五十日許〜成熟を〜
再度の實ハ質^{ニイタク}疎脆〜種あり〜初度の種を再

播くべしわして三次の蕎麦は其の熟期や遅しとて然るに十日と出
づるが故に通計百五十日して三収と得るなり其のて東國北地は其の
寒や、嚴なりとて其の地の融ぐ事必五箇月を得べし其の三収の功を
奏せざる事ありとて然るに或は寒の甚き時遅く冷の來る事早
く等と慮るは第三次の苗の長育するころその畦の間を軽く耕して
種と下まゝに收穫の時第三次の苗の大きき三寸長なるべし其の常
期に先づり事を得べくとて初より其の法に隨つて畦間を窄くする
事あり一年は五大収の功を奏すべし若夫天氣不順ありて諸穀
不よく不登あると大むね二月の頃候なる少あるべし其の年その
生民の命を以て憂ふべし貯藏
食用 釀酒性質 高野讓
稲麦の苞を以て桶に入れて貯すべし
二物考と見よべし

馬鈴薯 和蘭名アールトポツポル ハ咬啗吧薯 ジャカマライモ 奥州にてアツフラとて今ぞて
考めれば種を和蘭人より得て北奥の邊に種しりて甲信より其の
傳りて播殖すて其の傳來の緣故はよく知らずや甲州薯秩父薯
清太夫薯といふ八升薯とてその生子の多きを以て其の年薯壽命
薯を以て其の備わぶべきとて其の年薯 異邦より西印度より拂朗
察諸厄利亞 西曆千六百年の後和蘭に傳へり 又亞墨利加
州に甚多し 遷居の者以て糧とす 西洋本竹學の大家なる雪隆
亞の林妙私出の薯の三益を擧げり其の砂土石田すべて諸穀熟
せざるの地は薯を以て烈風暴雨久霖ありて恙なきこと薯
殖簡易にして人力を勞する事なきことあり 培養良田畔路傍階
前廡下山野砂石寸の棄地を擇ぶ事ありて諸の穀菜殖せざる
の地は薯菜蔬豆畦の間は種べし然るに其の多しとて且肥大なるを

得んとすべしハ八夜ごうの地を耕し土塊を細碎して二三塊を種を
上り軽く土を覆ふべし。かくして三日計を経て芽を生じ土を長く
蔓生す蔓二尺餘に至るべし土をその末指しハ卷りて蔓止まり
覆ふべし。かくして三日計の新根を生じ蔓を出してその新舊二根を得る所
四五十塊をとり六七十塊を至るべし。此を新根の蔓ハ形小くして水氣
多し舊根の纖根に附くもの數十塊損簇し連珠の如くして滋味
あり以て來年の種子とすべし。故に和蘭は舊根新根を分ち種
るの法ありて以て一根に百塊若くは百五十塊の蔓を得るとす。其ハ
每塊芽を抽ずる事五六條ありて三寸計に至ると待ちてその餘々を
切りあし芽根と纖根にまき。薯魁を折ち取り毎年みるかの
如くして各處に移し植ゑたり。薯魁を反轉して
植ゑ更し芽の出て三寸許に至ると待ちてその如くは折ち取りて別の

如くして薯魁をいし。條の芽の蔓を蔓するなり。其の法甚煩ありし
こと。種子少く時を必とのせざる事を得ず。大かたは餘寒食
去りて地融するを待ちて耕して土塊を碎き平し。鋤して深さ四寸
半の溝を一行に鑿り馬鈴薯のその大塊を二三片に截断し
等と一尺餘を隔て二三顆づつを植へ。軽く土を覆ひ平し
一歩行むかの如くしてかくの如く九月に蔓を用ゑるなり。その根を
さす事四寸許に至ると截りて精氣外洩の路を絶ちてその根を
益肥大あり。め扱て貯蓄するハ牛馬の糞を培種つちかの法大く甘藷
同し。又播種の時培種も可なり。全く用ひざるに害あり。貯藏寒地
まの莖葉全く枯るを待ちて掘り取りて土室に貯めたり。其の地を掘る
事二三尺。編麥等の桿を布き馬鈴薯をおき。更その上より
藁と掩ひ。又土を以てその上より覆ひ寒氣を以て侵入せしむるを以て

口を一方に用き、茶葉をその銜とす。用し臨みてその口をこらむ。その
力く暖地、その葉を以て交側廐隔に置きて、又数歳の儲
を多くと欲せば皮を去り切して薄片とす。晒して令く乾き、
と苞に収束し、年々の風晒を要す。種類 三あり、白赤黄あり、
赤い大なるもの、水氣多し、滋味少し。黄いや、茶味あり、故に秋蘭と
す。殊に白を貴ぶ。地宜しうとて、然らざるもあつたり。大
くは種多て試むべし。食用 煮或を蒸して、飯に和し、菜なり。
或は合す、茶味あり、又汁を投してその氣を去り、乾く者、温湯
にやわけて煮食す。その餘粉或は福麩コニヤクと和す、或は蒸シロ、
て酒を造る。等みる。二物考あり。性質 毒あり、滋養の功あり、
胃を養ひ、飢と極み、且甘諸の如く、甘し過ぎて、酸嘔、
生ずるの患あり。

この一頁より高野護の勸農 二物考を略抄するに、その題言を案
ずるに、三収蕎麦を以て上野澤渡より、瘍醫福田宗禎に得
馬鈴薯を、同國伊勢所なる、柳田昌藏より、得たることを、
一冊より鐫せり。この二種を加え、與へて以て世に傳へ、
海に賣まべし。と云ふ。福編とあり。民の富安逸長する常に
安し、神にして凶荒の災を慮かる事なき。その時、いかに
泣き、天に籲ひ、胸を椎ち血を嘔き、初て悔改の心を生ずれ
ども、更に一二の平年、或は見ざるに、忽ち恙解り、復す。それ
その平時より方りて諄々として教誨す。敢て従ふ者、其の多し。
それ、況や誰か一巻の書を、買ふもの、あやむかしく、其を買ふ
もの、或は有志の王侯と抱負の學士の、あやむかしく、其を買ふ
みづから、その人なり。其の時、その書の行り、其の多し。

あらうすあう終る地棄粉砕して以て齧齧を覆ふに期せんもの
 今天民も遠く慮あきまの如く危を平時に誘ふべしやあ
 馬鈴薯も本邦に傳り事久しとて或いは盆中の玩とあす
 の今年凶荒に人々を驚かす若夫の時方つてお目と布告せり
 恐る人々も沁入せん若夫二年をまがよの二百とま同く
 覆誦の具るん區々微力その書をまき買て以て天下に廣布
 する事あらうすあうその要文と略物して齧齧に災するあ人の
 功と會て已う功とすなり似るもの也此の作者私
 して天下に公せざる吾が知せざる所も澤山のやま事を得
 たり
 此の圖を以て不幸にして長生を遂げの時あつたか其眞を
 寫すにやあうの事と得るして原圖と横寫を以て區々泣血の書と
 思ふ

○時疫除

増山河内舟殿之成市濟を以て書舟魚

時疫除の書舟魚の用る具煩う

のころの書

一時疫のハ大津海を思ふとよく書く
 其の書舟魚の用る具煩う

右醫自歴ある

一時疫のハ若荷の根と書くと突くと書くと
 香て

右時疫後極急方ある

一時疫のハ中房を突くと書くと書くと
 其の書舟魚の用る具煩う

何れも黄毫よりなりしる時片断より四五盞入二盞よりせんトして是を度脱て汗と云ふなり一若葉のそよそよハ枝にてあり

石綿真人言ふ事ある

一 時疫より福神降り外強く二氣遠ひのこりたるきてくもむハ芭蕉の根をばさくして汁を煮居りて飲て

石時後梅急言ある

一 一切の食物毒よりくり海の色くある木その魚鳥獸より喰飲し用ひて具死うのこりる毒一
一 一切の食物の毒よりあり芋ハむハ皮ハ毒ハる皮を免又てぬるを湯よりさめて飲て

但し草木の葉と喰てはくも何れも

右農政全書にある

一 一切の食物の毒よりくりて胸を腫張痛ハ
苦參とありて能くハ腹食を仕ハキして

右同前

一 一切の食物よりくりてくもむハ右麦地粉と云

右本草綱目にある

一 一切の食物よりくりては鼻より血あきくもく苦
一 玉子粉をこきてくもむハ血止近用ひて

右衛生易学の書

一切の食物の毒のあり様は右に述べたる黒大豆とありてやん、炭酸も用ひたり、魚の毒のあり様は、
ハナハナとあり、
一切の食物の毒のあり様は右に述べたる黒大豆の豆焼の粉、
下蛤貝の粉、
アトハナハナとあり、

右子金書のある

一蘭と食ひてこれ中にも、
みけとのてり、

右夷堅志の書

右の書方、
常道土、
雑食の毒のあり

まゝの年、
味也

享保十八年丑年三月

望月三菜
丹羽正伯

右の書方、
下十頁

右の書方、
去明四君、
村、

105

方々文村々領々地獲不可不觸々

方々通可々相觸々

四月廿八日